

2019 年度  
関西福祉科学大学大学院  
社会福祉学研究科  
臨床福祉学専攻

修士論文題目

地域資源による支え合い活動の創出に関する研究  
—キリスト教会における教会員の互助に着目して—

指導教員（ 齊藤千鶴 ）

社会福祉学研究科臨床福祉学専攻

学生番号 11810002 氏名 水村 要

## はじめに

わが国の戦後におけるさまざまな発展による急速な社会変化は地域や社会の在り方を変えてきた。特に 1960 年代の高度経済成長は、社会構造の変化のきっかけをつくり、家族員数の減少、核家族化の進行、長く継承されてきた共同体的関係の衰退などから、親族や地域の結びつきの希薄化を進めた。さらに都市化の進展は、さまざまな労働環境（労働時間、労働手段、労働の場）のもとで人々に多様なライフスタイルを構築させ、新しい価値や考え方を生み出した。こうした生活のさまざまな局面における多様化は、地域コミュニティの在り方を大きく変えていくことになった。

このようなことから、高齢者の社会的孤立などをはじめする福祉課題が生まれ、それぞれの地域の現状や地域住民と専門職による福祉課題の解決力をより強化させることが求められている。社会福祉基礎構造改革の一環として、2000（平成 12）年に施行された社会福祉法には「地域福祉の推進」（第 4 条）が明確に示され、これまでの画一的な社会福祉の提供から、利用者が暮らす地域と生活に即した福祉サービスの提供に変わり、国から都道府県・市町村にその権限と責任を移行する分権化が進められた。また、同年には介護保険法が施行され、その基本理念として、「できる限り在宅で自立した日常生活を維持できるように支援すること」が目指され、2005（平成 17）年の改正では、介護予防の視点がより重視されることになり、より小さな地域単位でのサービス提供への転換が推進されるようになった。その後、2011（平成 23）年の改正で「地域包括ケアの推進」が位置づけられたことにより、「地域包括ケアシステム」の構築がいつそう目指されている。

地域包括ケアシステムとは、「介護以外の問題にも対処しながら、（中略）介護保険のサービスを中核としつつ、保健・福祉・医療の専門職相互の連携、さらにはボランティアなどの民間活動も含めた連携によって、地域の様々な資源を統合した包括的なケアを提供すること」であるとされている<sup>1)</sup>。つまり地域包括ケアシステムとは、高齢者が日々の生活の中での安全、安心や健康を確保するために、一人ひとりの暮らしにあった住まいを中心とし、医療や介護、又その予防だけではなく、福祉サービスを含めたさまざまな生活支援サービスが一体的に提供できる地域の仕組みのことである。

しかしその一方で、今日の希薄化した地域社会では地域住民同士が自発的に関わり支え合うことが難しい状況となっている。さらに、介護と育児に同時に直面する世帯や、障害をもつ子と要介護の親の世帯への支援などといった、個人・世帯単位で複数の課題を抱え複合的な支援を必要としている場合や、制度の狭間におかれ既存の制度やサービスが受けられない、あるいはサービスは存在しているが担い手が不足しているなどの原因により支援が継続的に提供できない機関や組織も存在する。

このような状況を踏まえて国は、上述したような地域社会に存在する課題を解決するため、これからの地域社会の在り方として「地域共生社会」を提言し、それに伴う「我が事」「丸ごと」の地域づくりが進められている（厚生労働省 2016）。地域共生社会では、制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を越えて、地域住民や地域の多様

な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を越えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会が目指されている。現行の法制度上では高齢者に限定されている地域包括ケアシステムではあるが、全年齢に「拡大・深化」させ、全ての住民を対象とした新しい地域包括支援の仕組みを構築していくことが提唱されている。「地域共生社会」は「地域包括ケアシステム」を深化したものであるなら、ケアシステムでもいわれているような自分でできることは自分で行う「自助」をベースに、地域住民同士が互いに支え合い助け合う「互助」を活用し、自助・互助・共助・公助を組み合わせた、地域での支え合いを目指していくことであるといえる。

しかし、制度には必ず狭間が存在し、国の財源の問題などもあるため、共助・公助には限界があるため、すべての地域住民の生活課題などを福祉サービスだけでまかなうことは現状では困難である。そのため、地域における互助への期待はとても大きなものとなっている。

一方で、互助という概念は、「近隣での助け合い・支え合い」という認識に留まり、それがどこでどのようにして成り立ち、継続されていくのかといったことなどは明確にされていない。さらに、地域では、子どもから高齢者、障害者や外国人、一人暮らしや家族などさまざまな住民が生活を営んでおり、それぞれライフステージが違えば物事の考え方や価値観も異なる。そのような中で、年齢などの枠組みを超えた活動の場を構築することができるのかという点など、「地域共生社会」の実現に向けてはいくつかの課題が懸念される状態である。

そこで本研究では、キリスト教会の活動に着目することにした。キリスト教には、地域に教徒が集うキリスト教会という場が全国に存在する。教徒は毎週決まった曜日、時間に集い教会活動や活動後の茶会などを通し人間関係の構築がなされている。また、教会に訪れるひとは信仰を中心にしながらも、老若男女、障害の有無、国籍などを問わずさまざまな価値観をもつ人や世代が混ざり、人とひととの関りや活動を通して、より広域な地域住民同士のつながりをもたらしている。それは、福祉を目的とした意図的な関りではなくても、教会という場を中心としつながることで、地域や人びとの課題を解決しようとするための活動意欲や、つながりを持つことの充実感を得ることができるなどといった互助という行為を通した関係性が成り立っていると考えたからである。

つまりキリスト教会という場には、年齢や性別などの枠組みを超え、地域住民同士が自発的に関わり合い、お互いが抱えている問題をできる範囲で補い合い解決していくための仕組みが存在するのではないだろうか。そしてその仕組みを構成している要素を見出せば、現在も地域社会において課題とされている、互助による関係づくりのための一助となるのではないかと考えた。

すでに述べているように、地域での希薄化が進む現代における地域福祉を考えるにあたり、地域住民の互助による関係作りは重要でありながらも、その具体的な関係構築には大きな課題を抱えている。それらを考えるにあたり、キリスト教会における活動には「他人事」を「我が事」と捉え活動するための互助による関係性作りの要素があり、それは地域共生社会構築に近づく手がかりとなる。

以上を踏まえて、本研究ではキリスト教会における活動を助縁と位置づけ、教会内で行わ

れている互助行為が、教会外での助縁に基づく活動にどのような影響を与えているのかを明らかにする。それらを踏まえ、地域の希薄化を解決するための手がかりとして、これからの地域において必要な、地域資源における支え合い活動について考察することを目的とする。

## 第1章 高齢化の進展に伴う地域包括ケアシステムの推進の課題

本章では、わが国が進めてきた「地域包括ケアシステム」の目的と機能を述べ、ケアシステムを構築するうえで重要とされている、4つの助の一つである「互助」への期待と課題を述べる。

### 1. 地域包括ケアシステムとは

地域包括ケアシステムという概念は、山口昇<sup>1)</sup>によって創唱されたものであり、1974（昭和49）年後半から、御調町（現在は尾道市に合併）で展開された医療と福祉にまたがるケアの実践に与えられた名称である。それは、生命をとりとめた患者の生活の質(QOL:Quality of Life)を維持するにあたり、生活支援が医療と同等に重要な役割があるという認識のもと、医療と福祉の包括的ケアを「地域ケア」として実現することを実践の指針にしたものである（高橋 2012：3）。具体的な取り組みとして、「寝たきりゼロ作戦」という取り組みがあり、病院を中核とした保健・医療・福祉・介護を統合するというものであった<sup>2)</sup>。

そして、現在では「地域包括ケアシステム」とは高齢者が日々の生活の中での安全、安心や健康を確保するために、一人ひとりの暮らしにあった住まいを中心とし、医療や介護、又その予防だけではなく、福祉サービスを含めたさまざまな生活支援サービスが一体的に提供できる地域の仕組みのことであるとしている。また、それらのサービスの提供区域については、「概ね 30 分以内に駆けつけられる日常生活圏域（具体的には中学校区域を基本とする）」とも定義されている<sup>3)</sup>。

このシステムには、高齢者個人をケアする体制を構築すること、地域内における支援システムを構築することの二つの目的がある。加えてこの目的を果たすために「住まい・介護・医療・介護予防・生活支援」の5つの領域のサービスを日常生活圏域に整備することとされている。図1はそれらの5つの領域が別々に展開されるのではなくサービス利用者が住み慣れた地域での暮らしを基盤に生活を営めるように、福祉サービスや医療サービスが互いに連携しながら提供されるといった仕組みを作ることを図示したものである。

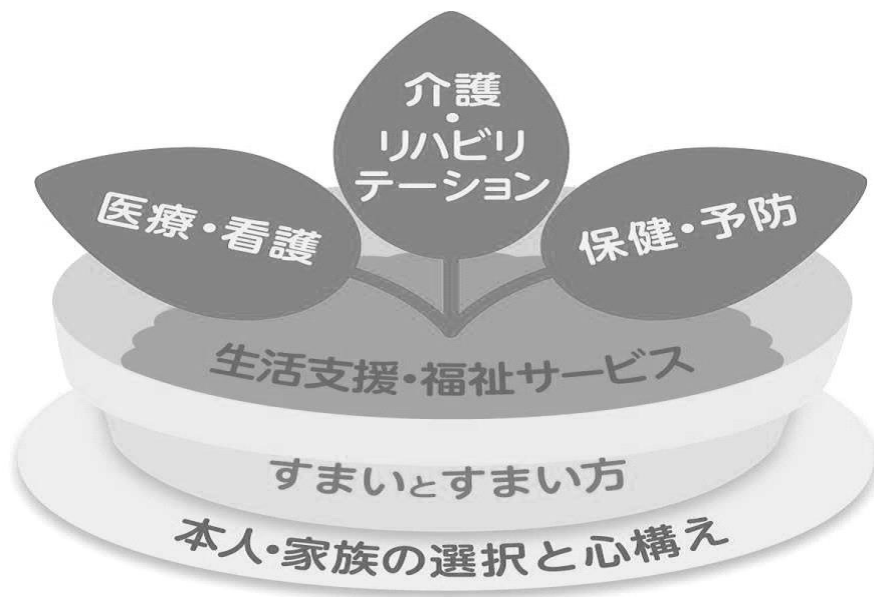


図1 5つの領域の関係性

出典：地域包括ケア研究会報告書（2013）「地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」

しかし、地域包括ケアシステムの構築については具体的な手順やプロセスが示されないまま、その責任だけが自治体に転嫁されているといったことが指摘されている（井上 2016：27）。

また、このケアシステム作りは日本全国で統一されたものでなく、各々の地域の現状や課題によってさまざまである。例えば、都市部と農村部によってそのシステム作りは異なってくるため、自治体側からすれば突然国から「降ってきた」システム作りは、限られた人員や財源のなかでどのように取り組んでいくのかといったように、行政現場は困惑している現状の（沼尾 2016：23）課題が指摘されている。

そこでこの「地域包括ケアシステム」をより充実した仕組みにするために、地域包括ケア研究会による報告書（平成 24 年度）にて地域包括ケアシステムを支える方法として「自助・互助・共助・公助」という概念が示された。このケアシステムを推進していくなかで、地域のなかで豊かに、自分らしい生き方を全うし過ごしていくためには、「自助・互助・共助・公助」という 4 つの助が協働する必要があるとされている。

## 2. 「地域包括ケアシステム」の構築における 4 つの助

これまで述べてきた通り、「地域包括ケアシステム」の構築が目指されており、なかでも近年の希薄化した地域社会においては、住民同士の「互助」の重要性が増してきている。「互助」という概念は、研究者たちにより議論がされてきたが、最近の動向として国の方針などに出てくるようになったのは、「地域包括ケアシステム」の推進が言われるようになった頃からである。それまでは「自助・共助・公助」の 3 つだけがいわれており、「共助」が近隣の助け合いであり、インフォーマルサポートであるとされていた。しかし 2009（平成 21）

年に公表された「地域包括ケア研究会報告書－今後の検討のための論点整理」内にて、図2のように示されている。

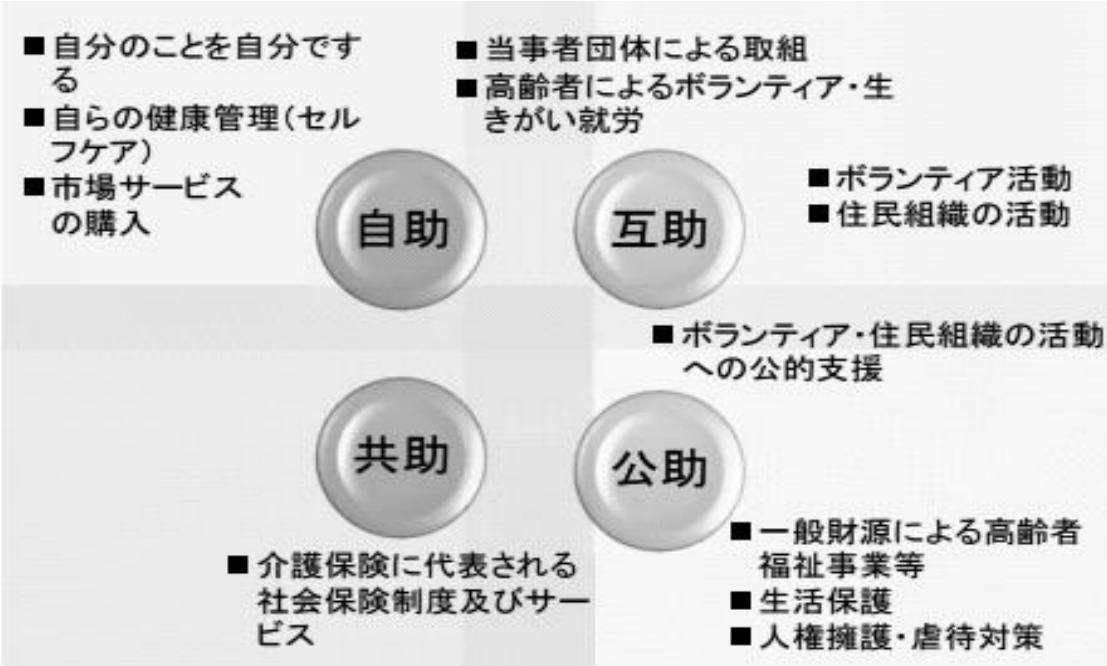


図2 自助・互助・共助・公助の枠組み  
出典： 地域包括ケア研究会報告書（2013）「地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点」

そしてこの図2をもとに考えると、「自助・互助・共助・公助」は以下の表1のように整理できる。

表1 自助・互助・共助・公助の内容

<div> <div>強</div> <div>↑</div> <div>インフォーマル</div> </div>	自助	・自分の力で住み慣れた地域で暮らすために、自分自身の生活課題を自発的に解決する力。	<div> <div>フォーマル</div> <div>↓</div> <div>強</div> </div>
	互助	・家族や友人、クラブ活動仲間など、個人的な関係性を持つ地域住民同士が助け合い、それぞれが抱える生活課題に対し、お互いで解決し合う力。	
	共助	・制度化された、社会連帯。	
	公助	・自助・互助・共助では対応しきれない問題に対して、最終的に対応する公的な制度。	

表1をみてわかるように、自助に向かうにつれ自発的に解決する力やお互いで解決し合う力といったような目に見えない曖昧な表現になっていき制度化されたサービスに依拠しない行為となっているためインフォーマルの側面が増し、逆に公助に向かうごとに具体的

に制度化されたものに依拠していくためフォーマルな側面が増すと捉えることができる。

このように、これまではインフォーマルな支え合いもフォーマルな支え合いも「共助」という文言が用いられていたが、地域でのインフォーマルな支え合いは「互助」に言い換えられ、現在では「共助」は税による制度化された社会連帯と位置づけられている。このことから、国が地域内での「互助」という関係に期待を寄せていることがわかる。「互助」という概念は、相互に支え合うという意味では「共助」と共通するが、費用負担が制度的に裏付けられていない自発的な支え合いであり、お茶飲み仲間づくりや住民同士のちょっとした助け合い、自治会など地縁組織の活動、ボランティアグループによる生活支援、NPO 等による有償ボランティアなど幅広い形態が想定される。

### 3. 地域の支え合いに関する住民の意識

わが国において地域包括ケアシステムの推進がなされ、地域住民同士による支え合いである互助の必要性がいわれているが、それは国が一方的に必要性を述べているだけでなく、地域住民自身も地域における住民同士の支え合いである互助は必要であると感じている。図3は、平成28年版厚生労働白書がおこなった調査の結果であり「地域で困っている人がいたら助けようと思うか」という質問に対する答えをグラフにしたものである。

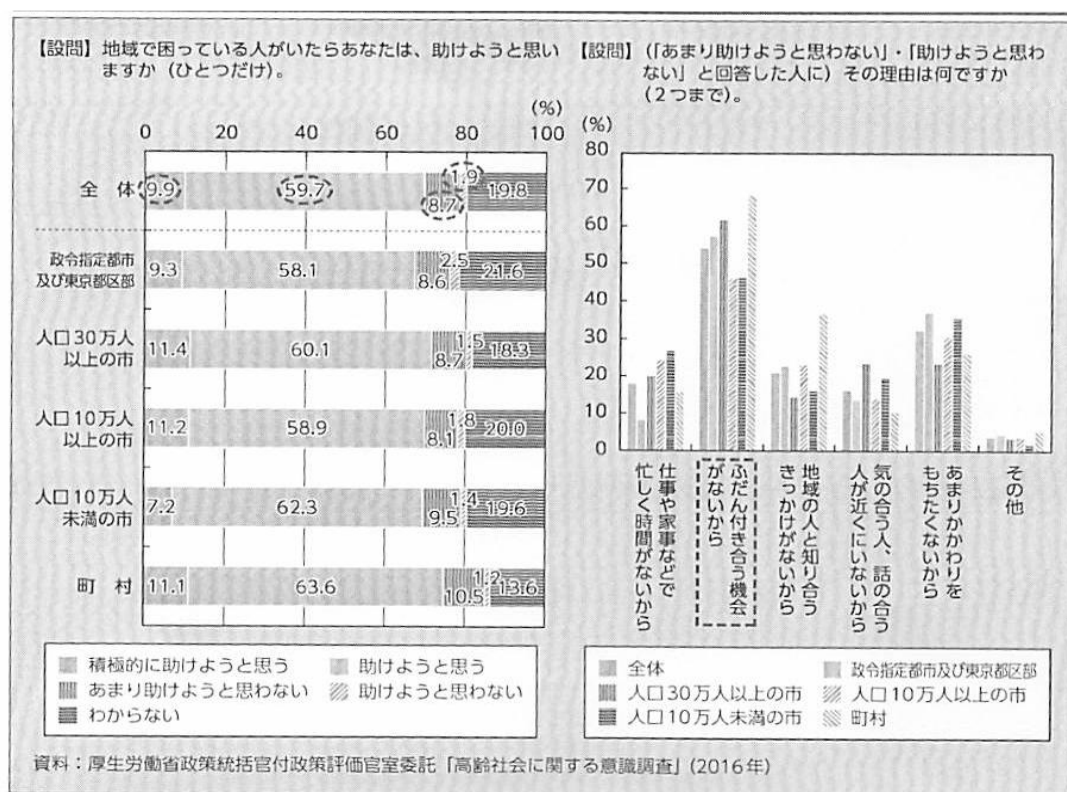


図3 困っている人がいたら助けようと思うかに対する答え

出典：平成28年版 厚生労働白書「人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える」,第2章 第3節地域の支え合いに関する意識 p.62



図3をみてわかるように、「地域で困っている人がいたらあなたは、助けようと思いますか」という質問に対し、「積極的に助けようと思う(9.9%)」と「助けようと思う(59.7%)」をあわせた「助けようと思う」と回答したひとは69.6%であった。このことから、困っている人がいれば助けたいという意識をもった住民が多くいることがわかる。一方で、「あまり助けようと思わない(8.7%)」と「助けようと思わない(1.9%)」をあわせた「助けようと思わない」と回答したひとは、10.6%となっている。また、「助けようと思わない」としたひとの答えとして最も多いのが、「ふだん付き合う機会がないから」であり、特に町村地域において高いものであった。

さらに、「実際に実施したい地域での支え合い活動は何ですか」という問いに対しての結果が以下の図4のようになり、「見守り・安否確認」が37.2%、「通院、買い物等の外出の手伝い」が35.3%、「ごみ出しや電球の交換などのちょっとした力仕事」が28.7%となった。これらは、公的な福祉サービスでは対応しにくい部分であり、互助をはじめとするインフォーマルなサービスに依拠した活動である。加えて、「地域の支え合いの機能を向上させるためにはどのような施策が有効か」を尋ねたところ、「要援護者の支援マップづくり」、「住民ボランティアのコーディネーターの養成」に続いて、「多世代が交流できる拠点の整備など支え合いを行う場の提供」が31.7%であった。

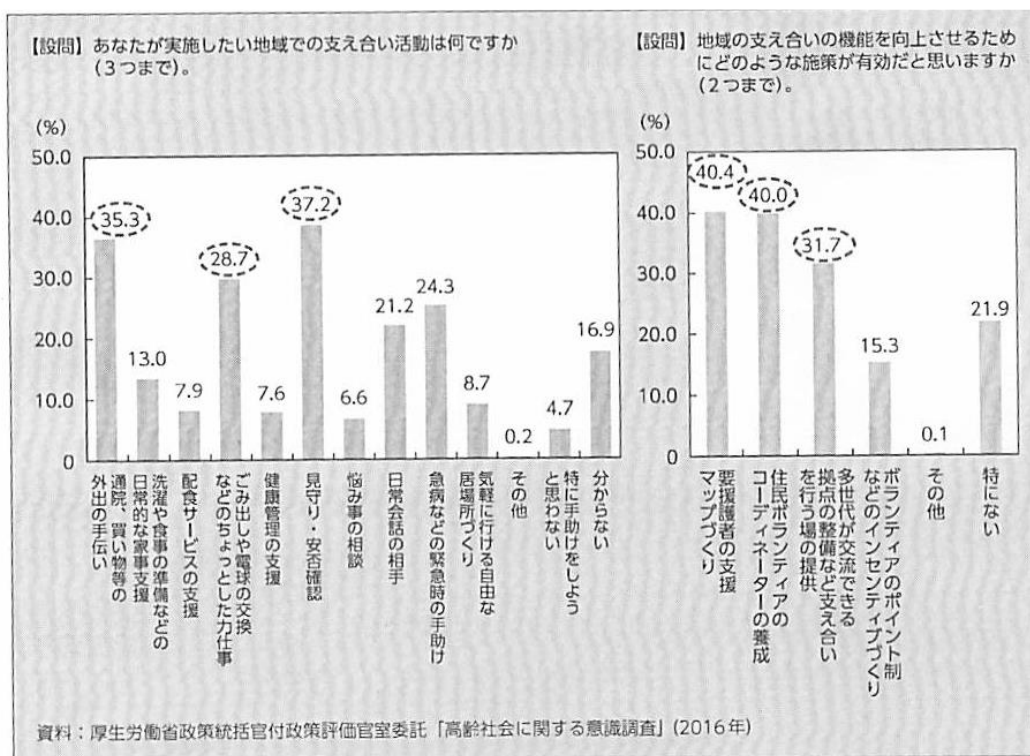


図4 実施したいと思う支え合い活動と有効と思う施策

出典：平成28年版 厚生労働白書「人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える」,第2章第3節地域の支え合いに関する意識 p.63

地域社会で生活していくには、自分自身で行き詰った時、他人の助けが必要であり、時には自身が支える側に回ることも必要であり、そういった役割を持ち続けられるようなひと同士が支え合う「互助」が重要である。前節で述べたように「自助・互助・共助・公助」の協働は必要だが、制度には必ず狭間が存在し、国の財源の問題などもあり、共助・公助には限界があるためすべての地域住民の生活課題などを福祉サービスだけでまかなうことは現状困難である。これらのことから、「互助によるコミュニティの再構築」や「地域における自助と互助のもつ潜在能力を再評価すべきである」(内閣府 2012)といわれるほど互助が必要であり、上述したように地域住民も地域での支え合いを必要としており、我が国における互助への期待は大きなものになっている。

しかし、期待は高まっている一方で、近年わが国が進めている地域包括ケアシステムをはじめとする制度・政策は、地域住民たちの力に依拠しすぎている側面もある。また、互助という概念は、「近隣での助け合い・支え合い」という認識に留まり、それがどこでどのようにして成り立ち、継続されていくのかといったことなどは具体的に提示されていない(松繁 2012: 113)。今日、地域社会の希薄化がいわれているなかで、住民同士が自発的に関わり支え合うことは難しく、互助という行為に基づく地域住民同士がつながりや支え合える関係性を作ることが大きな課題となっている。

## 第2章 3つの縁からみる互助行為の機能とキリスト教会への着目

「助縁」という関係が構築されている場として、キリスト教会の位置づけを検討する。さらに先行研究を通して互助という行為の分類を整理し、本研究における「互助」の定義づけをおこなうことを目的とする。

### 1. 3つの互助行為の分類からみる互助の定義

前章で述べた、地域に期待されている互助は、住民たちの労働が農作業中心であった時代においてはごく当たり前のように行われていた行為であったといえる。しかし、その時代における互助を現代にそのまま引き継ぐことは難しい。なぜなら、昔と今では社会構造が異なり、現在では農作業だけでなく多種多様な働き方や雇用形態が存在し、様々な価値観が芽生えたことで、人と人のつながりに関する考え方も変化してきているからである。したがって現代においても互助は重要とされているなかで、現代社会に応じた互助を考えることが必要である。そこで本節では、農作業中心の時代において生活の知恵としておこなわれていた「ユイ」「モヤイ」「テツダイ」の3つの互助行為の種類と対象と現代における互助との違いを整理し、本研究における互助の定義づけをおこなう。

ひとが生活を営んでいくとき、自身の力だけでは限界があり、他者からの支援なしに生活を存続させることは難しい。長い歴史においてひとは、生活を守るために互いに協力してきた。そうした暮らしの支え合いのなかで、一人では思い浮かばない生活の知恵や、生活するうえで困難なことを他者と助け合い解決するすべも生まれ、相互扶助を成り立たせていた。こうした協力関係は、家族をはじめとするタテの社会関係から始まったが、その後生活圏の変化などにより家族以外の社会集団や地域社会をはじめとするヨコの社会関係へと広がりを見せていった。そしてそのような地域社会をはじめとするヨコの社会関係のなかで、「ユイ」、「モヤイ」、「テツダイ」といった互助行為がおこなわれていた。恩田（2006：9）は、「ユイ」と「モヤイ」など見返りのある行為のことを広義の「互助行為」とし、返礼のない無償の行為であるテツダイを「片助行為」と位置づけ、この3つを最広義の相互扶助の行為（互助行為）と分類している（図3）。

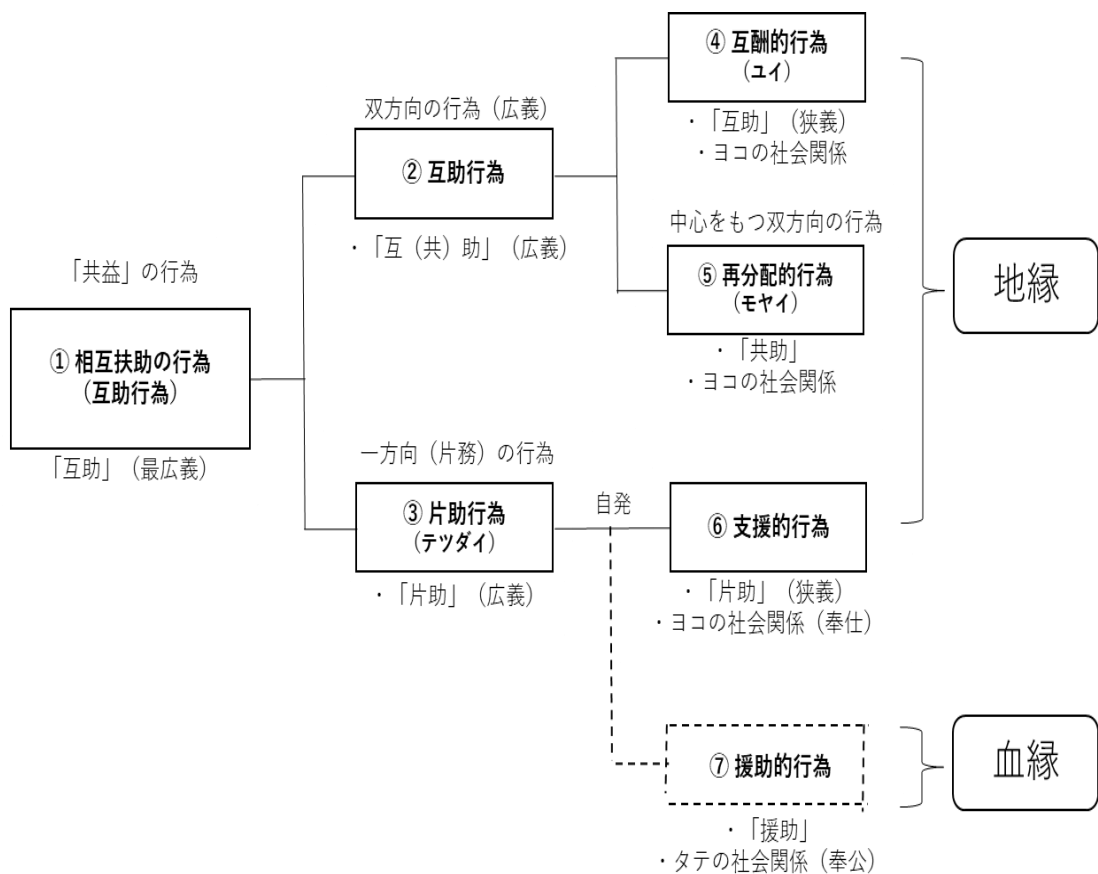


図5 互助行為の分類

出典：恩田（2006）の「互助行為の分類」を一部加筆，互助社会論,世界思想社,p.8

この図3から、ユイとは、行為者と相手が互酬的な関係にあり、主体と客体が入れ替わることもある互酬的行為のことであり、モヤイとは、主体と客体が特定の行為者関係に限定されず、行為者間で資源の分配を行いその成果を再分配する再分配的行為であることがわかる。この2つは、双方向的な関係であり、ユイが労働には労働で返す労働交換、モヤイが共有地を維持し管理をする協同労働とされているように、行為をすとなにかしらの見返りが得られる。一方でテツダイとは、無償で見返りを期待しない一方向な支援的行為であるため、互酬性や再分配性を持ち合わせておらず、ユイ・モヤイとは大きく異なるが、最広義では3つとも互助行為に分類される。以上を踏まえ現代社会においてこれらに該当する行為を整理すると表2のようになる。

表2 互助行為の分類と内容

	ユイ	モヤイ	テツダイ
機能	互酬的行為	再分配的行為	支援的行為
農作業時代における行為	・田植え ・稲刈り ・屋根の葺替え など	・道普請（道路の新設や修繕の工事） ・村の仕事や共有地の維持・管理	・冠婚葬祭 ・突発的な困難に際する手助け行為（病や災難 など）
現代における行為	・「互助」 近隣同士の支えあい	・「共助」 介護保険に代表される社会保険制度及びサービス	・「互助」と「公助」の間 ボランティアや住民組織の活動への公的支援

出典：互助社会論（恩田 2006：7-9）を基に筆者作成

近年、政府が地域社会に求める互助とは、3つのうちユイほどの強制力はないが「お互いに支えあう（互酬性）という関係」のことを述べる事が多く、互助イコール近隣同士で互いに支えあえる関係といった認識にとどまっている。しかし、本来互助とはあくまでも関係のなかで行われる一つの行為であり、現代で認識されているような関係性というよりも行為そのものという認識に立つものであるといえる。これらのことから本研究において互助とは、互酬的な行為だけでなく支援的な側面も持ち合わせており、双方向だけでなく一方向の側面も持ち合わせている行為であると定義し、互助行為は社会関係のなかでおこなわれるものであると整理した。

## 2. 助縁によるナナメの社会関係

定義したような互助が行われるとき、多数間にせよ個人間にせよそこには必ず行為者と被行為者が存在しているため、行為の担い手がいないと成立しない。一般的にそのような行為がなされるとき、担い手とされるのは、タテの社会関係とされる血縁とヨコの社会関係といわれる地縁であるとされている。

恩田（2006：12）は民族社会学という文脈のなかで、血縁は、図5であるところの③片助行為から枝分かれしている⑦援助的行為であり、タテの社会関係と位置付けられている。これは対等な社会関係を前提とし、同じ仲間を助ける⑥支援的行為とは少し異なり、助力格差を基にした保護と被保護の関係である。そしてその血縁に基づく⑦援助的行為は、親子をはじめとする親族や血族といったような親族関係に顕著にみられる。しかし非血縁関係の他者からの助けが必要になった場合や、家族とは異なる場所で生活を営んだりすることで生活圏が広がったことにより、家族以外の組織に所属したり、地域住民と関わることで地縁というヨコの社会関係を築いている。

前節でも述べた通り、④互酬的行為、⑤再分配的行為、⑥支援的行為は地域住民をはじめとする地縁によって展開されてきたものである。地縁はヨコの社会関係であり、これらの行為をおこなっている担い手として代表的なものは、町内会や自治会である。日本全国どの市

町村にも、町内会ないし町会、あるいは自治会、農村部においては区会または部落会と呼ばれるような住民の自治組織が存在している（倉沢ら 1990：2）。しかし近年、これらの自治会をはじめとする地縁組織は、加入率の低下や活動参加者の減少などにより、活動の停滞が問題視されており（澤田 2017：2）、長い月日をかけ地域で培ってきた地縁の衰退が指摘されている。

これまでタテの社会関係である血縁でおこなわれていた互助は、時代が過ぎるにつれて、ヨコの社会関係である地縁へと広がっていき、地域住民同士による互助へと変容してきたが、それも近年では地域社会の希薄化といわれるように損なわれつつある。一方でこれまで培ってきた地縁による互助行為により、地域が支えられてきたことは事実であり、近年では従来の血縁や地縁とは異なる、第三の縁であり、ナナメの社会関係ともいえる「助縁」を生み出している（図 4）。恩田（2006：12）は助縁について、「タテの親戚とヨコの地域住民の互助行為だけではない、広く一般市民による第三の社会関係に基づく互助行為である」としており、助縁という概念はこれまでの親戚の血縁や地域の地縁にとらわれず、より多様性のある新しい連帯の形であり、それはこれからの地域共生という社会にフィットした新しい関係であるといえる。

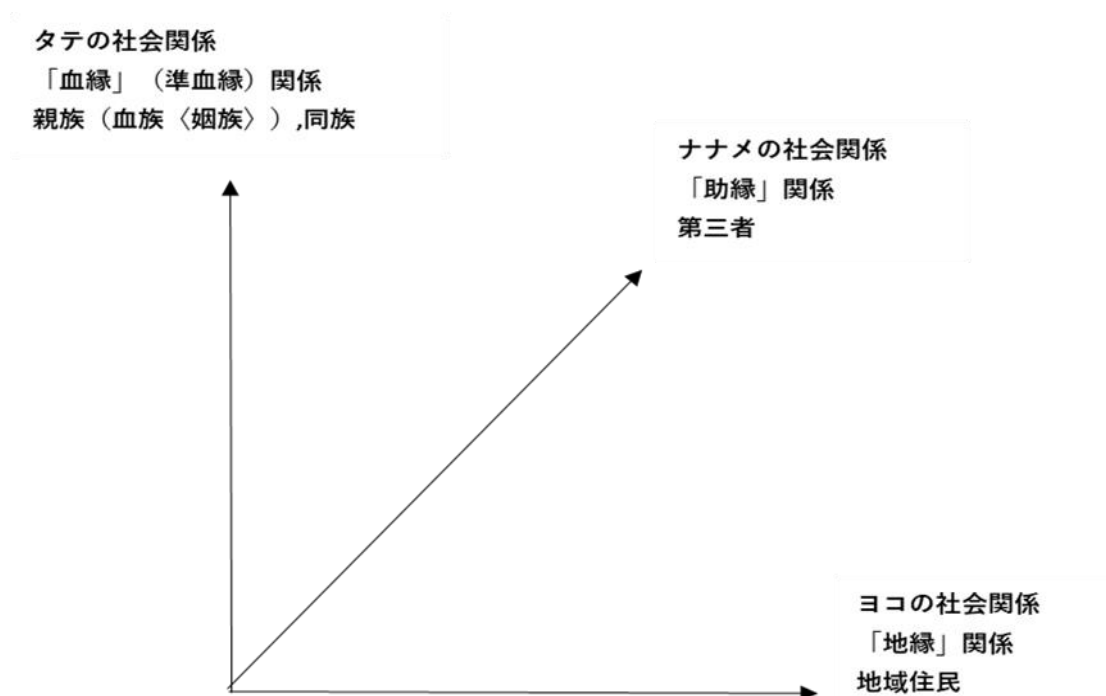


図 6 社会結合の関係—「血縁」、「地縁」、「助縁」

出典：恩田（2006）互助社会論,世界思想社,p.12

しかし、助縁というナナメの社会関係ではどのような互助行為がおこなわれているのか明らかにされておらず、またそのような新しい縁でつながる関係を培う可能性のある場についての研究もみられない。また互助という概念は、社会学の領域では研究が進められているが、地域福祉の領域では必要性だけが先行しており、どのような関係性のなかで互助がお

こなわれているのかということ、互助を通してできた関係性が地域にどのような形で寄与されているのかなどの研究は進められていない。その結果、互助に対する認識は、今日も不明瞭なままであり、地域社会における地域住民同士の関係の希薄化が改善されないままである。

### 3. キリスト教会への着目

これまでを踏まえて本研究では、互助行為から生み出される助縁を明らかにするために、宗教施設に着目する。これまで、宗教施設を地域の資源と捉え、活動の拠点にすることの可能性をはじめとする研究（川添ら 2019：163-166）などはみられるが、宗教施設の中で培われている互助行為に関する研究はなされていないからである。

本研究では、宗教施設のなかでもキリスト教会（以後、教会）に焦点を当てる。わが国におけるキリスト教の教徒数は全体の約 1.0%（平成 28 年度宗教年鑑：51）であることから、多くが仏教や神道などに属し、さらに無宗教という人たちも年々増加している。しかしキリスト教系の社会福祉施設や学校・病院などは信徒数の割合に対し多く存在しており、無宗教のひとつも、意図していなくともキリスト教と関わる機会は他の宗教に比べ多い。また、檀家という制度が存在している仏教では血縁の側面が強く、長い年月をかけ地域社会に根付き、馴染み地域に貢献してきているため、助縁よりも血縁の集団による地縁として位置づけられるのではないだろうか。

日頃から付き合いのある関係が困ったときの互助行為に転化（恩田 2006：8）するため、毎週決まった曜日・時間に教会に集い礼拝を挙げることが、一週間の生活の一部となっており、教会で培われている互助行為をはじめとする関りはより密度が濃いものであるといえる。つまり、毎週教会員同士が顔を合わせるため、礼拝以外にも互いの趣味に興じていたり、世間話をしたりと礼拝という共通の活動以外にも各々でさまざまな活動を共にしている場合も多くみられ、長い年月をかけ互助行為が成熟しているといえる。さらに教会では年齢・性別・人種・障害の有無などの垣根を越えた関係がもたらされており、それはこれからの地域福祉に活かす要素を秘めているともいえる。

これらのことから、教会内において行われる互助行為と教会外の第三者に対する互助行為には、助縁という関係性に影響を与える要素があるのではないだろうかと考えた。また、今日の地域福祉において苦慮されている地域の希薄化を解決するための一助として、これからの地域福祉が目指す社会を体現している教会に着目することは有用であると考えた。

### 第3章 キリスト教会の教会員に対するインタビュー調査

前章までの仮説を実証するため、教会員の活動の取り組みに着目し、教会内の互助行為が、教会外の助縁にどのような影響を及ぼしているのかをインタビュー調査を通して明らかにする。

#### 1. 調査概要

##### (1) 調査目的及び調査方法

本調査は、教会における互助行為にはどのような要素があるのかを明らかにし、教会外での第三者に対する助縁という関係性に与える影響を整理する。

本調査は3名の調査協力者からのインタビュー調査を行った。インタビュー法は、感情や思考などの直接観察できないものについて、当事者の視点からその経験を理解し、その意味付けを捉えるうえで有効なデータ収集法であるとされている(徳田 2019: 205)。そのため本調査は互助という目に見えず、対象者が無意識のうちに経験してきたものを意味づけすることを目的としているため、インタビュー法が適していると考えた。

インタビューでは事前にインタビューガイドを作成し、できるだけ幅広い内容のデータを得るために①個人の属性、②教会内の活動について、③教会外の活動からインタビュー項目を作成した。また対象者とのインタビューの流れを乱さないように半構造化インタビューの形式で行った。半構造化インタビューは本来聞きたかった事柄のほかにも、対象者が言いたかった内容を聴くことができるといったように聞き取りを柔軟に行うことができるため(中畠 2015: 46-49)、インタビューを通して対象者がこれまで経験してきた活動のなかで培ってきた、経験の組織化を対象者と調査者との相互作用のなかで進めるなかで意味づけをし、日頃から認識していない互助という行為を焦点化することに有用であると考えたからである。

期間として2019年11月11日～2019年11月17日にインタビュー調査を行い、2019年12月15日にインタビュー内容に対する分析結果に調査対象者の語りが正しく反映されているのかを確認を得るために再度インタビュー調査を行った。なお1回目のインタビュー調査で語られなかった内容についても追加した。

##### (2) 分析方法

半構造化インタビューで得られたデータを逐語録化しKJ法を用いて分析した。KJ法は、川喜多二郎が考案した研究法であり、図解化によって情報がコンパクト化でき結果をまとめやすいとされている。またデータのグループ分け、図解、叙述化のプロセスで、新たな発想や仮説を生み出すことができる分析方法であるとされている(田中 2010: 17)。そのためKJ法を用いて分析することで、まだ明らかにされていない助縁という関係における互助行為による助縁の現れを図解化して整理することができると考えたため、この分析方法を用いた。また分析においては、分析が偏たよらないよう、複数の観点、複数の専門性を交えより妥当性の高い分析結果を得るために、研究者のトライアングレーションとして、指導教



員とスーパーバイザーが加わった。

分析手順として、逐語録のカテゴリー分けを行い統合できる箇所はグループとして統合した。またそれぞれのグループとカテゴリー間の関係については関係図を作成し、それに伴ったストーリーラインを叙述している。加えてストーリーラインにおいてグループを〔 〕、カテゴリーを【 】、調査協力者の語りは「 」で示している。さらに互助と助縁の関係性を整理した。

### (3) 調査対象と選定理由

調査は京都府にある Z 教会の教会員 A 氏に依頼し、A さんから縁故法により B 氏・C 氏を紹介された。A 氏を選定した理由は、信徒会長という教会のリーダー的役割であり、どの活動でも中心的立場であるため、他の教会員からの相談を受ける機会も多い。したがって教会内での活動に関する調査を行う上で、最も適していると考えた。なお 3 名の基本的属性の概要は以下の表 3 の通りである。

表 3 調査協力者の基本的属性

	A 氏	B 氏	C 氏
性別/年齢	男性/50 代後半	女性/50 代前半	男性/70 代後半
職業	障害者施設の職員	工場・郵便局勤務	定年退職後
信仰歴 (現在の教会での活動歴)	幼児洗礼 (約 32 年)	幼児洗礼 (約 25 年)	幼児洗礼 (約 40 年)
主な 教会内での活動	教会に訪れる外国人に対する日本語の勉強会 営繕的活動	子ども会	教会外との対外的活動
現在の教会に通うようになったきっかけ。	父親が転勤族だったため、名古屋・高松・茨木と住居を転々としていた。本人が 20 代後半頃の時、高齢になった両親と生活を共にするために引っ越し、現在の教会に所属。	子どもの頃から、現在の教会に所属していたが、就職後教会に来る頻度が、年に 1 回になり、それが数年続いていた。しかしシスターからの呼びかけにより、教会にくる回数が増え、現在に至る。	元々長崎の教会に所属していたが、父親と共に住むために大阪に住んでいた。結婚して子どもが生まれたことで、家を建てるために現在居住している場所に家を建て現在の教会に所属。
インタビュー時間 (1 回目)	約 1 時間	約 1 時間	約 1 時間
インタビュー時間 (2 回目)	約 45 分	約 45 分	約 45 分

### (4) 調査の倫理的配慮

本研究は、関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の所定の手続きにより、承認を得ている（承認番号 19-07）。調査協力者に対して、本調査の趣旨を説明し調査の許可を得て、氏名などは特定されないよう、記録することを伝えた。また、聞き取りの場面においては、調査の目的を説明し、IC レコーダーに録音することについて了承を得たうえで記録した。

## 2. 分析結果

### (1) A 氏の基礎情報

現在 50 代後半で、幼児洗礼であるため信仰歴は年齢とイコールであるが、教会員として教会内の活動に積極的に参加しだしたのは、就職してからしばらく経った 30 代前半ごろからである。大学生時代は名古屋に住んでおり、名古屋の教会に所属していたが、その頃はミサが好きで教会に通っていたため、ミサ以外の教会活動への参加は少なかった。そしてその後大阪で就職や結婚を経て現在の教会へ所属することとなった。40 代後半ごろから、教会内でのリーダー的な立場として活動している。

### ① KJ 法による A 氏の分析

逐語録から分析を行った結果、7 個のグループと 20 個のサブカテゴリー（グループ化できなかったものもサブカテゴリーとする）が形成された（表 4）。

表 4 A 氏のサブカテゴリー・グループ一覧

グループ	サブ カテゴリー	語り
役割の変化	若年期における 信仰姿勢	他のところも若い時と今では変わってきてるかな。
		若い時はミサが好きっていうこともあって、受けてるだけでもよかった。
	世代交代による 活動の担い手の変化	もう他の人っておじいちゃん・おばあちゃんやからね。
		具体的なところでいくと、今うちの教会では僕は歳の的には一番若造やねん。
		だから僕より下の世代の男はおらんねん。
		いるけど教会に来てないっていうニュアンスのほうに近いかな？
		だから 56 歳の僕が一番若造。
		親子ぐらいの年齢差があっても、一番若いのは僕。
	外国人の参画	だけど今は外国の人がいる。
		うちの教会ではとくにベトナムの就労できてる人たちとか、フィリピンから就労できている 20 代の子たちがいる。
		だから彼らがむしろ話しやすいのは僕の世代になっちゃう。
		年齢的に近くてコミュニケーションがしやすいのは、僕ら世代になるね。
		それでも歳の差的には、親子ぐらいやね。
教会内における 主な活動	日本語の勉強会	教会単位での活動としては外国の人たちの日本語検定の手伝い。
		お勉強会みたいなとかをしている。
		日本語の勉強会を教えるのも同じ。
	営繕的活動	それと教会内の木こりや草刈りなど営繕的な活動をしている。
		教会の中の設備もそうやけど、そういう業者を呼んで設備の環境を整えている。
		教会は祈りの場。
		だから教会をきれいに保つようなことを中心に活動してるかな。
		おじいちゃんらに、木こりとか草刈りとか聖堂の維持管理設備のものをやれというわけにはいかないの。
		常に教会を神聖なクリーンな場として、清潔感を持った場として保つ。

		当然みんなが来る場所だから環境的にも不自由のない環境を整えとかなあかん。
		教会の維持管理に関してはクリスチャンとしてはそれも祈りの一つ。
活動を通して得たもの	営繕的活動の際に得る 精神的安定	そういった作業をしている間も、他のことを一切考えない。
		教会のための祈りの時間としても過ごせるっていう精神的な部分もある。
	勉強会から得る信仰に対する良い刺激	勉強会のほうでは恥ずかしながら外国の若者のほうがはるかに信仰が厚いと感じる。
		彼らは生まれながらにして、そういう環境にいるからか純粋なクリスチャンやなと感じる。
		日本とは比べ物にならんという語弊がある。
		20代ぐらいの子たちが週に1日しかない休みを教会にくる。
		仕事が終わって夜のミサにもくる。
		日本人やったら仕事がおわって夜、飲みにいったり食事いったりする。
		信仰に対してもっとビュアだし大きい声で歌も歌う。
		姿勢が明らかに違う見てたらわかる。
		それはいい刺激、というか影響を受ける。
		得るもののほうが多いな。
		だからこそせめても、教会を綺麗に保つぐらいはせなあかんと思う。
		出稼ぎで来てるから僕らからしたらいうたらお客さんって形になる
		でも彼ら彼女らから得るパワーというか刺激は非常に感じる。
		それが自分たちの小教区でも、彼らを迎え入れることによって、姿勢も学べる。
		うちの教会の人たちもとてもいい意味で刺激を受けてるとは感じる。
		自分たちもそうやとおもってた。
		僕たちよりも教会にきてミサを受けたり、ほかの信徒たちと話したり、一緒に活動したりして関係を築くことが生活というか日常になってる。
活動の課題	教会員の高齢化	全員が一丸となってなにかをするというのは、なかなか難しい年齢層。
		仕方がないけど、教会のなかでも高齢化してる。
		彼らも彼女らも、若い時には自分たちが教会の軸になってたねん。
		僕が30手前ぐらいの時は、その人たちが完全にマンパワーを発揮しててんな。
		実際あの人らが、回してだけど世代がもう変わってきてる。
		そのひとらの子ども世代がちょうど50ぐらい。
		だけどその更に下の世代の人がおらんから、結構きつい。
		若い人はおらへん。
	教会員への葛藤	やってる人は頑張ってるががんやる。
		でも教会やからミサにあずかって帰るだけの人ももちろんいる。
		それは全然悪いことじゃない。
		自分も教会の一員なんだという意識をみんなに持ってもらえたらと最近思う。
		自分が教会全体の代表になるまでは、そんなこと意識したこと一回もなかった。
		もてなしてもらおう人という感覚をどうしてももっちゃうよね。
		本人たちにその気があったかわからないけど、周りも気を使っている。

	接し方	高齡教会員に対する	周りがなんとなく隠居させてしまってる。
			やりますやりますって全部やっちゃうし、彼らもじゃあ、って受け身にはなってる。
			でも、まだ隠居するには早いですよっていうのは言いにくい。
			だから何でも若い子にしてみたら、してみたらっていうのが当たり前になるよね。
			だから、まだまだ参加してほしい。
			元気なんやけど隠居しちゃってる。
			まだまだ動けるのに、っていう雰囲気はある。
	担い手不足	次世代の	いいです！やりますから！っていわれるとお客さんになっちゃう。
			20代ぐらいの子はみんな家出て、仕事しにったりしている。
			そこに住んでて、教会にもくる20代の世代の子はいないな。
			それが困ったことといえば困ったことかなあ。
	葛藤への対処		だから、あれしてこれしてっていう風をお願いするかな。
			高齡の教会員にも、どんどんたのんでできることをやってもらう。
			ほんでやってもらったら、ちゃんとお礼を言う。
			ありがとう、素晴らしかったねって言う。
			そのサイクルやとおもうけどな。
			ありがとう、素晴らしいイベントになったねとか素晴らしいミサになったねとか言ってほしいよね。
			これまでは、僕たちがやるだけって感じやったのをこっちからもお願いする。
			手伝ってもらやしこっちも手伝うして形にしている。
			ミサの準備であつたりとか、歌の準備であつたりとか彼ら彼女らができることっていうのは教会の中にもまだまだある。
			自分らもかつてやってたことやから、あてというか頼りにされたいとおもう。
教会外での活動	過去のボランティア活動		さすがに仕事を始めてからは、どうしても余裕がなくなるからなあ。
			30年前に遡っていいなら、ボランティア活動をしてたな。
			病院の入浴の介助のボランティアをしていた。
			教会とは全然関係ないところ。同じ大学の同じ学科の先輩に誘われてやってた。
			病院にいてバリアフリーでもなければリフトも腰掛けるような椅子もないところで。
			体をかかえて浴槽のなかにいれてだして、自分の体でささえて体洗ったりしてた。
			5年卒業の学科やったから、5年間そのボランティアをしてたかな～。
	利用者との関り	障害者施設での	障害者との関りでも学ぶことが沢山ある。
			教会でも最近はどうしてるけど、特別な人として腫れ物にさるように関わらんと、一緒に何かをするときも、頼むこともあるし、頼まれることもある。
			施設の利用者に信者の方が居られるけど、教会に来たら、教徒がその方のお手伝いをしたりする。
			そのなかで、この人はどう接してほしいのかっていうのは、教徒間で共有できるように工夫してるな。
			自分自身は職業柄、関わるのがおおいけど、この関りが仕事に生きてることもあるよ。
人脈の広がり	ボランティア活動における宗教に対する理解者との出会い		その介助をしたひとは阿含宗の信者さんだった。
			その信者さんにもうひとりついてた人がいてその人が奈良の天理教のひとやってん。
			そのひとらが入ってるボランティアの団体のひとらと非常に仲良く深く付き合えた。
			宗教は違っても、活動を通してコミュニケーションもできた。
			お互いの教会を行き来もした。
			宗教の垣根をこえてお付き合いができた。
			友人もできたことが一番、よかったかな。

	他宗教に関する学び	宗教は違えど、なにかを信仰しているっていう共通点があった。
		はなしやすかったし、関係を築いていきやすかった。
		その人が学んできた、経験してきたこととか教えとかを聞くと学びにもなるしね。
必要な柔軟性 仕事をする上で		若い人たちの考え方や、今の社会に適応したものの考え方をしないといけないと感じる。
		今は若い人の考え方や外国人労働者とかいろいろな人の考え方を取り入れないといけない。
		自分一人だけの考えじゃだめ。
教会内の経験の 応用	多様な価値観に 対する受容	この歳でいろんな人の意見を聞いて考えるようになった。
		教会で多様な人たちと付き合っていたり関わっている。
		だから違う年代や国籍のひとの考え方とか価値観にも敏感にもなれる。
		かなりの年齢層の幅のある世界。
		だから対応力とかそういう人たちとの接し方見たいなものも自然と身についてきた。
		いろんなモノの考え方のひととか、価値観を持っている人がいるんだなと。
	多世代や様々な文化的な背景を 持つ人との出会い	やから変に年寄りやからとか若造やからっていうような感覚はないかな。
		普通の人って子どもから大人になるまで大人になってもつながるったり関わる人って限られてるとおもう。
		でも教会ではそうではなくて、自分の親・おじいちゃん、おばあちゃんぐらいの人。
		他にも外国の人とか普通の生活ではなかなかかかわる機会のない人と関われたりする。
	人々との関わり方や 接し方に気づける環境	人とかかわり方とか接し方を 僕みたいに 50 代になってからでも気づける環境っていうのはありがたいとおもう。
		ありがたいしすごくいい経験というか、得たもの。
		教会外の生活とか活動にもそれは生きてると思う。

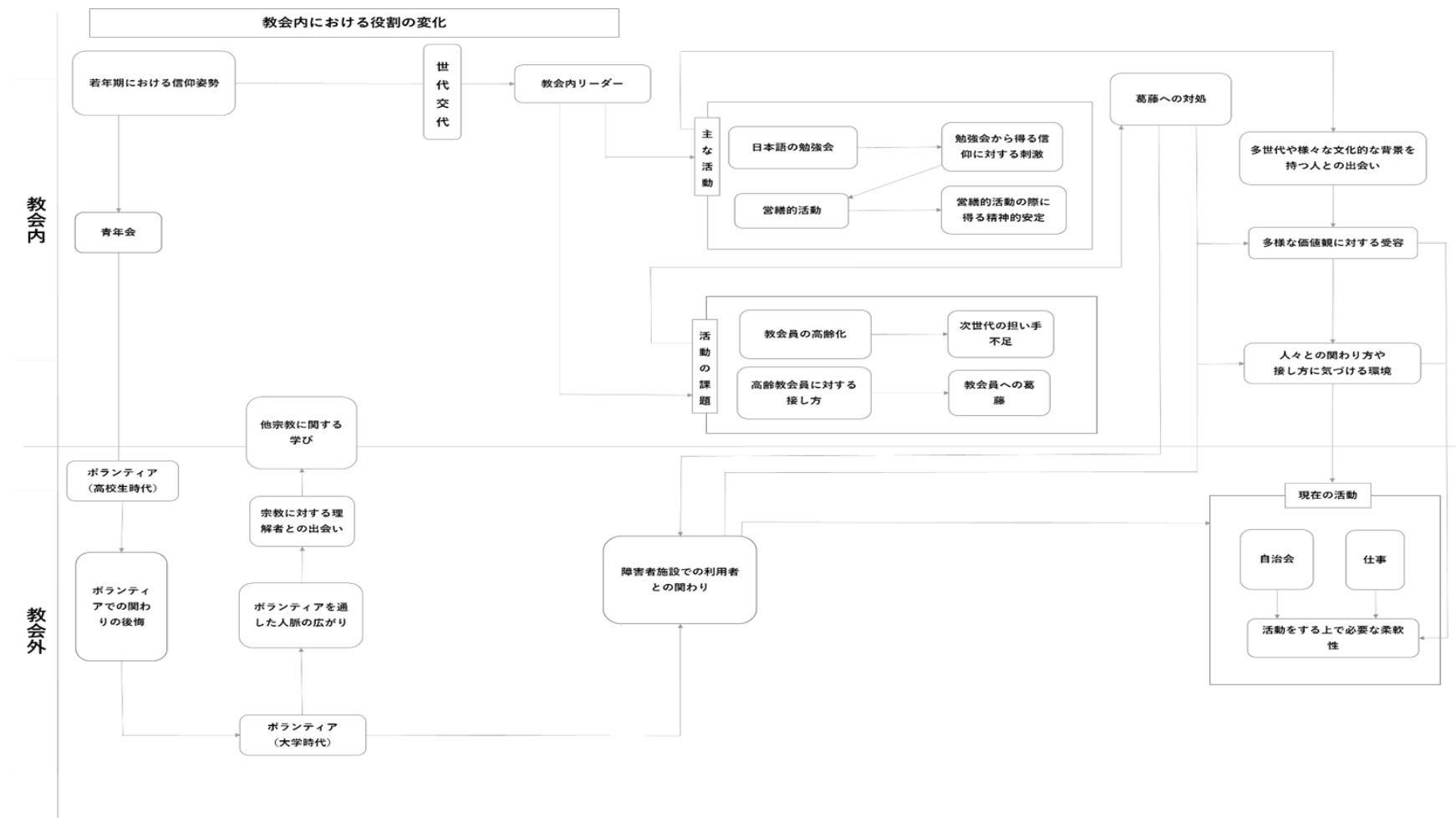


図7 A氏のこれまでの活動と価値観の変容（カテゴリー表に基づく関係図）

## ② A氏のストーリーライン

インタビューを通して、まず【若年期における信仰姿勢】から【世代交代】を経て【教会内リーダー】になるまでの「教会内における立場の変化」が語られた。そのなかで消極的な関りでやりきれなかった【ボランティア（高校時代）での関わりの後悔】が【ボランティア（大学時代）】に繋がっており、教会内・外を越えた【他宗教に関する学び】と【障害者施設での利用者との関り】へと繋がっていた。

また教会内での外国人に対する【日本語の勉強会】では、教会に来る外国人から信仰に対する前向きな姿勢などといった【勉強会から得る信仰に対する刺激】を要しており、その刺激が【営繕的活動】を促進させ、【営繕的活動の際に得る精神的安定】を生み出していた。

一方でこれらの活動を行っていくうえで、高齢教会員に任せず、なんでも先にやってしまうというような他の教会員の【高齢教会員への接し方】に対する【教会員への葛藤】、【教会員の高齢化】に伴う【次世代の担い手不足】などといった「活動の課題」も抱えていた。現在では、Aさんを中心に高齢教会員の方が適している活動など、任せられることは任せ、できないことを自分たちで補うといったような【葛藤の対処】をしており、そのことから【多様な価値観に対する受容】を生み出していた。

それだけでなく、「主な活動」を通じた【多世代や様々な文化的な背景を持つ人との出会い】や障害者の方達は、どのように接し関わってほしいと感じており、逆にどのような関りは嫌と感じているのかという学びを得ることができる【障害者施設での利用者との関り】も【多様な価値観に対する受容】を育んでおり、このような国籍や年齢、障害の有無にかかわらず、多様な【人々との関わり方や接し方に気づける環境】で、さまざまなひとと関わる機会のある「現在の活動」をおこなっていく上で重要な【活動をする上で必要な柔軟性】を身につけるための経験を教会内で培っていた（図7）。

## ② A氏における互助と助縁の位置づけ

先行研究で示されている互助の枠組からA氏の語りを分析すると、教会内の互助として、【葛藤への対処】で示された「高齢の教会員にも、どんどん頼んでできることをやってもらう」や「手伝ってもらい、こっちも手伝うして形にしてる」という語りがあった。この語りは、教会を維持するために必要になる行為であるため、恩田（2006）の互助の整理においては、教会内における教会員間の関係性は互酬的行為として判断することができる。また、この関係性における行為は、活動を行っていくうえで担い手と受け手を分断せずに、できること・できないことを相互に補完し合う関係性でもあり、双方向の互助行為でもある。

続いて、教会内での【日本語の勉強会】は、キリスト教徒の外国人もいれば、そうでない者も多くおり、キリスト教徒限定の関係性でないため、広く一般市民への第三者に対する社会関係であると位置づけることができる。したがって、教会における【日本語の勉強会】という取り組みは、恩田（2006）の互助の整理でみると支援的行為として判断することができる。つまり、教会という場を用いた助縁としての取り組みであるともいえる。また、【障害者施設での利用者との関り】では、「教会でも最近はそうしてるけど、特別な人として腫れ物にさわるように関わらんと、一緒に何かをするときも頼むこともあるし、頼まれることもある」「施設の利用者

に信者の方が居られるけど、教会に来たら、教徒がその方のお手伝いをしたりする」という語りから、【葛藤への対処】での互助行為が活かされており、結果として教会外の助縁ともいえるボランティア活動に反映されていることが示された。

これらのことから、教会内での年齢や国籍を越えた多様なひととの関りは、相手がそれぞれどのような考え方や価値観を有しているのかといったことを知るきっかけになり、相手の価値観を受容することで多様なひととの関わり方や接し方の経験を蓄積していることが明らかになった。

また、そのような経験が現在の自身の価値観や教会外への活動に影響を与えていたことから、教会内での活動はこれからの時代で必要になる、多様な人びととの関り方を経験できる特異性があることが示唆された。

#### (4) B 氏の基礎情報

現在 50 代前半で、幼児洗礼であるため信仰歴は年齢と同じであるが、教会員として教会内の活動に積極的に参加しだしたのは、就職後の 30 代前半ごろからである。

20 歳で専門学校を卒業し、就職を機に教会活動への参加の頻度が減ったが、シスターの呼びかけにより、再び教会に来ることになった。現在は、教会内の子ども会において子どもたちに教義や典礼などを教える教育活動をおこなっている。

#### ① KJ 法による B 氏の分析

逐語録から分析を行った結果、5 個のグループと 17 個のサブカテゴリーが形成された（表 5）。

表 5 B 氏のサブカテゴリー・グループ一覧

グループ	サブ カテゴリー	語り
主な教会活動	子ども達に対する教会に 関する教育活動	私は今教育部で活動してる。
		基本的には教会学校とかやな～。
		同じブロックの違う教会と子ども会の合宿とかしたりする。
		キリスト教って聖書がすべてやねんけどそれを、小さい子にそのまま話しても、理解できひんやん。
		例えばクリスマスはプレゼントだけじゃなくって、待降節があって降誕祭があってっていう意味合いをかみ砕いて説明する。
	教育活動を通して 得た学び	自分が理解せなあかんから、すぐく学びにもなる。
		相手に伝わりやすい、言い方とかをせなあかんからそれも勉強になるよね。
		合宿で子どもたちだけでなく違う教会の人たちと関わりもてたことがよかったかな～。



		そういう機会や時間ももて一緒に活動するっていうのが勉強にもなるし、楽しいし得れるものかな～
活動における葛藤	これまで経験のない子供とかわる不安	やっぱり教育部で活動するうえで小さい子に目線を合わせて、キリスト教のお話をするのは難しい。
		教会に来ている子どもにも教義を伝えるのも難しい。
		子どもと関わったことになったから、不安やった。
		始まりはみんな小さいところから今に至るけど、その一番基礎のところでも人に伝えるのは難しい。
	キリスト教徒としての不安	それも含めての自分なんやけど、キリスト教っていうか宗教って難しいな～って思う。
		困ったことっていうのは自分がキリスト教に関して、無知であることかな？
		教会役員入ってるけど、仕事はしたくないんだ！っていえばそれまでやしね～。
		前からかもしれんけど今って理不尽な世の中やと思う。
		なんで神様はこんな試練を与えるのかって言われたときに答えられない、、。
		そういうの聞かれたら怖い。
		だから教会いってます！ってなかなか大っぴらにせんってのもある、、。
自身を取り巻く環境の変化	就職に伴う教会活動への参加機会の減少	20歳ぐらいまで専門に行ってそっから、仕事とかし始めた。
		それぐらいからしばらく教会からはなれてた、、。
		とりあえず年に一回クリスマスだけは、教会にいかうっていうのがしばらく続いてた、、、。
	日常生活における不安や困難	その時ちょうど、色んなことに迷ってた時期でこれでいいのか、どうしたらいいのか自分一人では解決できなかった。
		何かに救いを求めてた時期だった。
	シスターの働き掛けによる教会への復帰	その時にシスターに「貴方たちクリスマスにしかこないの？それはだめよ。あっはっは～」みたいなのを言われた。
		全然悪気とかは無かったと思う。
		「月に一回はいらっしゃい」みたいなのを言われた。
		それで月に一回が週に一回になった。
		そうやってるうちに部会に入れられてってなってるうちになって感じかな～。

教会内の活動で得られたもの	不安や困難の緩和 独りで抱え込んでいた	そんな時にシスターに言われて教会来てみたら、同じようなことで悩んでる人もいれば、人生の先輩もいた。
		その中で安心もしたし、たくさん相談にも乗ってもらった。
		そういうことがあって困難を乗り越えられたかな～。
		その時シスターに言われてなかったら今とは違ってたかもね～。
		その一言がなかったらどうなったか、わからんし教会でいろんな人と出会って救われることもなかったんかなって考えるときあるかな。
	多世代や様々な文化的背景を持つ人との出会い	結局教会っていうとこやけどひととのつながりをもてることが一番大きいことやおもう。
		私は独身やから子どもとか 20 歳ぐらいの若いひととか外国のひとと話したり、仲良くなる機会ってほとんどない。
		住んでるとこも違うし、教会に来てなかったら会うことない人たち。
		教会には老若男女、それから今やったら特に外国の人、特にベトナムの人たちがようけ来てくれてる。
	人々との関わり方や接し方に気づける環境	そういう子たちと一緒に活動できることって最初に言うてたみたい縁みたいなものも感じる。
		歳とか国が違うことで考えとか価値観的なものって違うもんやと思う。
		感じられるだけでも得るものは大きいしそこに身を置いてることで、そういう人との関わり方を学べる。
		そういう社会のなかで、そういう人たちとかかわる前から、教会でかかわる機会があるやん？
		この世代の人は、なにを考えているんやろうとか、こういうときにどうするんやろうとかっていう場面に関わることがある。
		自分よりはるかに年上のおじいちゃん・おばあちゃんとかすごい若い子とか、まあいまなら違う国からきてるひととか、いろんな人とかかわっていかなあかん時代。
		時代っていうか私の置かれてる環境がそうなだけかもしれんけど。
	多様な価値観に対する受容	でも実際に関わって一緒に活動してみて、この人らはすごい人なんや！って思ったねん。
		すごいパワーのある子たちなんやって思う。
		人と関わるためのハードルが他の人より低いと思うねんな。
		教会にはいろんなひとの価値観を教わって自分が変わることがたまにあるねん。

教会外での現在の活動	信仰生活における葛藤		信仰をあかししていきたいとおもう。
			だけと思う自分とできない自分の葛藤の中で生きている。
	地域活動		私はいま月に一回すごい田舎なんやけど自分が住んでる地域の手作り市とか、朝市みたいななんをやってる。
			その中で町おこしみたいな地域のグループにはいってる。
			それこそ小さな喫茶みたいなお茶会してる。
	若年層との価値観のギャップ		今の時代は SNS とかで知り合った人と会ったり遊んだりする感覚はわからんな〜。
			今の時代がいいのかわるいのか、便利なのはいいことやおもうけど、、、。
			私は相手がどこのだれか分かってて関わるのが当たり前の社会で生きてきたから。
			その子がどんな環境に身を置いてきたかとか、置いてるかによって変わってくると思う。
			あと若い子だけじゃないのかもしれへんけどコミュニケーションとか人付き合いが下手やなって子が多いって思うかな〜。
			下手なんかそもそも取る気がないんか、まあどっちもあるやろな〜。
			自分の興味のあることにはつながれるけどそれ以外は、線を引いてる子おおいよな。
			怒ったら怒り方ひとつでパワハラとかなんやら言われる時代やから難しい。
			それやとなんか困ったりしたときまで、頼みにくいやん？困ったりせんのかなって思う。
			やっぱ失敗ってこわいけど人間って失敗してみんとわからんこともあるしな、。
			向こうの扉をたたき続けるのはせなあかんけど、向こうに期待したらあかん。
			信用は、ある程度の信用はせなあかんけど、期待はしたらあかんっていうのかな？
	地域活動を通して得た喜び		よかったことは、人に喜んでもらってというか人の喜びが自分の喜びになることもあるんやなって。
			高齢者の多いところやさいに、人とあまり会わない、家に引きこもりがちな人がよくくる。
			お茶飲んで色んな人と関わって、楽しいな〜今日もいい日やったわ〜ってかえっていかはる。
			そういうところを見たりすると、あ〜やってよかったな〜って思うしまたやりたいな〜って思う。
			自分が与えているようで相手に与えられているっていうみたいな。
			抽象的かもしれんけど、困りごととかを抱えているひとの目線っていうのかな？

施設利用者との関りによる価値観の変容	こひつじの苑の人が教会にきはって話してた時に、誰かが愛ってなんでしょうねって話をし ててん。
	愛ってなんやろう、愛の反対ってなんやろうって。
	その時に私とかはん～愛の反対は憎しみ？とか憎悪めいたものとかかな～？って話してた。
	そしたら施設の利用者が「愛の反対は無関心」って言わはってん。
	あ～無関心か～なるほどな～っておもって。
	なるほどっていうか、すごいそれが頭の中にのこってた。
	やっぱりあの方たちはすごいそういうことを敏感に感じはるんやと思うねん。
	障害者の方たちって自分で好きにものを言えなかったり、 言葉もすぐに出てきにくかったり、体も思うように動かしにくい。
	そこにきて関心も持たれないってなると、それがすごくつらいことなんやろうなって。
	その時に愛ってそんなに難しいことなんかな～って思った。
	その時に利用者の話を思い出した。
	愛ってそんな複雑なことではなくて、相手に対して関心を持つっていうただそれだけやと思 ってん。
他者を助けることによる 自己の助け	でも人から関心を持たれてない、無関心なんだってなったら、その人は、どんどん孤立して いく。
	自分では解決できない、誰かの手を借りたいって思っても周りに誰もいないってのはすごく つらいこと。
	人にしたこと、相手に関心を持たなかったっていうのはいつか自分に絶対かえってくる。
	いまはありがたいことになにも自分にとって苦しいことっていうか、助けてほしいことがな いから助ける側やおもう。
	でも助けてほしい側に回ることもあると思う。
	そういう時に自分の日ごろの人との付き合い方とか接し方って、困ったときにでるしね。
	なんでもそうやけど自分でできることを、そこが自分に与えられたとこっておもってやるよ うにしてる。
	だから相手を思うことは自分を助けることでもあると今は思ってる。
社会の縮図としての教会	キリスト教には隣人愛っていう教義があるけど、なかなか教義やからっていつでも全うでき るわけない。
	善良な人間じゃないっていうのは自分でもわかってる。
	汚い部分もあるし、教会きつつも、他の神社とか行くのとか好き。
	人としての曖昧さとか、汚さもあるけどその中での教会。
	教会に来る人がみんな清い心を持って間違いを犯さへんなんてことは、まずありえへん。
	教会いってるからって、悪いことはせんかもやけど常に清らかなわけではない。
	でもこういうことって教会に来て人やかからとか、信仰心とかあまり関係ないと思う。

	基本そういうこともいうし、人に偉そうなことも言う。
	教會的な教えでいうと、自分が罪びとってという自覚があるから。
	教會的じゃないとこでいうとやっぱりここにいる人たちと関わることで、安心するし、落ち着く。
	教會って社会の縮図やな～っておもう。
	いい時もあれば、いい面だけでなくてダークな面、根深いところもある。
	どんな世界にもいざごはるし、いい人ばかりじゃないしかといって悪い人ばかりじゃない。
	そんななかで自分がどう折り合いつけて、社会で生きていくかってとこやとおもう。
教会内の経験の活用	関わり方を学ぶことで、教會じゃないとこでも生かせることかな～。
	そして話を聞いたり、自然とできるようになった。
	そんな時は教會での関りがいきてるなってすごいおもうかな～。
	教會でそういう関りをしてたおかげで、職場の外国人労働者の子たちにもさっきゆうてみたいない関心もてた。
	そうするとその人たちはもちろん、職場の外国人労働者の人たちとも自然にかかわることができる。
	これは教會の中だけじゃなくて、自分が住んでいる地域の人たちにもそうやし、職場の人たちに対してもそう。

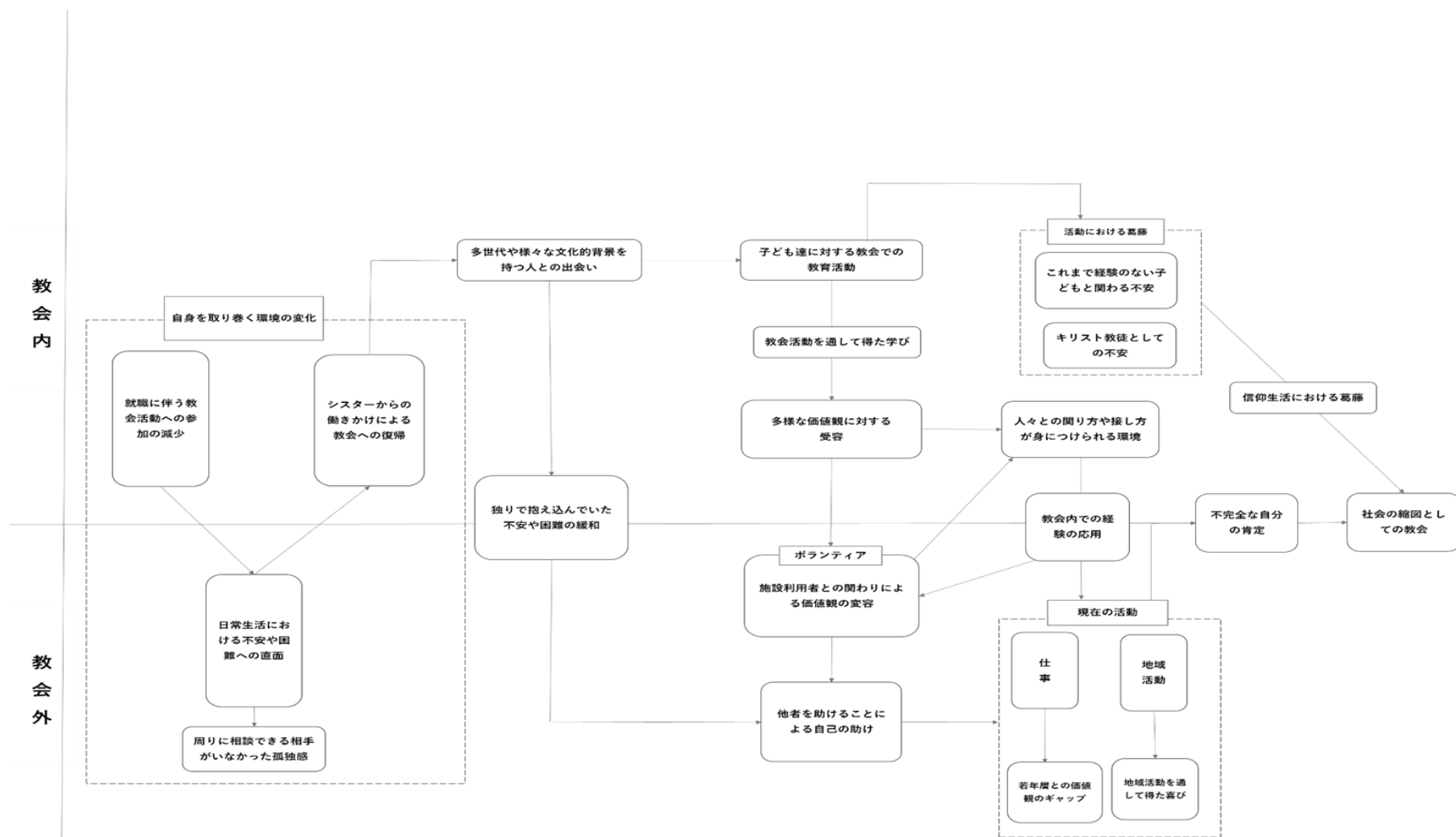


図8 B氏のこれまでの活動と価値観の変容（カテゴリー表に基づく関係図）

## ② B 氏のストーリーライン

インタビューを通して、まず【就職に伴う教会活動への参加の減少】の時期に、教会外での【日常生活における不安や困難への直面】し、周りに悩みを相談できる存在がおらず、孤独を感じていたことが語られた。その時期も一年に一度程度しか教会に通っていなかったが、教会の人に悩みを相談できるほどの人間関係は築けていなかった。しかし【シスターからの働きかけによる教会への復帰】を契機に、教会に通う頻度が増え、その結果、教会内での【多世代や様々な文化的背景を持つ人との出会い】のなかで多様なひとと関わり、悩みを聴いてくれる相手や、アドバイスをくれる相手を作ることができ、【独りで抱え込んでいた不安や困難の緩和】につながっていた。そして【独りで抱え込んでいた不安や困難の緩和】という他人に助けってもらった経験から、自分から相手に働きかけることも重要であるということに気づき、【他者を助けることによる自己の助け】という考えが生まれ、それは〔現在の活動〕におけるひととの関わり方にも影響を与えていた。

また【多世代や様々な文化的背景を持つ人との出会い】を基にした【子ども達への宗教に関する教育活動】のなかで、子どもをはじめとする多世代や外国人との関わりがあったことで、それぞれが持つ【多様な価値観に対する受容】が育まれたことにより、教会外での〔ボランティア〕内での障害者との関わりの中で、相手に関心を持つことの重要性を学び【施設利用者との関わりによる価値観の変容】が生まれていた。そしてこのような国籍や年齢、障害の有無にかかわらず、多様な【人々との関わり方や接し方に気づける環境】で、様々なひとと関わる機会のある〔現在の活動〕をおこなっていく上で相手への接し方といったことの疑似的経験を教会内で培っていた（図 8）。

## ③ B 氏における互助と助縁の位置づけ

先行研究で示されている互助の枠組みから B 氏の語りを分析すると、教会内の互助として、恩田（2006）の互助の整理に当てはまるものは見られなかった。しかし【多世代や様々な文化的背景を持つ人との出会い】をしたことにより、【独りで抱え込んでいた不安や困難の緩和】がなされたことで、【他者を助けることによる自己の助け】が芽生え、教会外における〔現在の活動〕へと活かされていた。さらに【子どもたちに対する教会での教育活動】を通し「教会にははる色んなひとの価値観を教わって自分が変わることがたまにあるねん」という語りからも読み取れるように【多様な価値観に対する受容】を生み出すきっかけになっている。このように、教会内・外の活動に影響を与えていたことから、恩田（2006）の整理には見られない新たな互助の可能性が示唆された。

また、【教会内での経験の活用】の「関わり方を学ぶことで、教会じゃないところでも生かせることかな〜」や「これは教会の中だけじゃなくて、自分が住んでいる地域の人たちにもそうやし、職場の人たちに対してもそう」という語りから、教会内での多様な人との関りを

通して培ったものが、教会外での〔ボランティア〕という助縁に影響を与えていることが示唆された。

これらのことから、年齢や国籍を越えた多様なひととの関りができる教会内の活動は、相手がそれぞれどのような考え方や価値観を有しているのかといったこと知る機会に恵まれており、その結果多様なひととの関わり方や接し方の経験を蓄積できているといえるだろう。こうした経験で得たものが教会外へのボランティアでの障害者との関りのなかで生まれた価値観に影響を与え、教会内での活動はこれからの時代で必要になる多様な人びととの関り方を教会外で活動する前に疑似的に経験できる特異性があることが示唆された。

### （３）Ｃ氏の基礎情報

出身が長崎であったため、長崎の教会に所属していたが、父親の実家が大阪にあり、一緒に住むために大阪に引っ越したため 20 代後半のころに大阪の教会に所属が変わった。そして結婚し子どもが生まれたことで、家を建てるために現在居住している場所に家を建て現在の教会に 30 代後半頃に所属を変えた。

C さんが現在の教会に所属して数年後にエキュメニズムという流れの中で創設された、教会外との対外的活動をするための部会を当時の担当者から引き継いで現在も活動をしている。

#### ① KJ 法による C 氏の分析

逐語録から分析を行った結果、6 個のグループと 27 個のサブカテゴリーが形成された（表 6）。

表 6 C 氏のサブカテゴリー・グループ一覧

グループ	サブ カテゴリー	語り
教会の方針の転換		当時にはエキュメニズムって言って教会がカトリックばかりに縛られるんではいけないという流れになっていた。
		宗教者として広く教会外の人との付き合いと教会以外の宗教を認めましょうという流れがあったんで違和感は無かった。
		それがカトリックの方向性だからってということで受け入れて、主要メンバーとしてこれも 30 何年ぐらい前からやってるね。
環境会とし いのち平和	活動 口としての 地域との窓	それが一つカトリックとしての窓口で、あとは地域の窓口ね。
		自治会との交渉とか、地域の文化サークルがここを使ってるからその連絡とか。
		もう一つは、慈しみ献金ってのをやってる。



		よく教会に来て、お金を無心にきたりする人がいる。
		今は司祭が常駐してないんで少なくなったけど、前常駐してる頃にしょっちゅうお金を無心にきてた。
		向こうは教会に来るんだけど、お金を無心にくるわけですよ。
		そういう人に対して司祭がこうお金を払ったり、払わなかったりお小遣いみたいのをあげたりしてた。
		それはちょっとよろしくないなって話になってね、教会でそういう基金を作ろうかっていう話になった。
		キリスト教会として来た人に、もうくんなどとは言えない。
		返さないかもしれないっていうのはわかってるんだけど、お金をプールしといて、いる人にはあげましよう。
		その管理とか、言ってみたら対外的なことを一手に引き受ける窓口を主な活動にしてるね。
	他宗教との関わり としての活動	それ以外では、他宗教とのコミュニケーションの窓口でもある。
		この地域に宗教懇話会っていうのがあって、それは市長さんと偉いお坊さんとかが発起人になって、亀岡の宗教会を一回集めて宗教者として社会にアピールしたり還元しようってのが今から 30 年ほど前に発足した。
		仏教と神道、それとカトリックとプロテスタント、それに大本教と立正佼成とか天理教とかそこら辺で、一緒に固まって活動してる。
		社会に対して毎年ずっと続けてるのは、市民を招いて講演会とかしたり宗教者が地域に貢献しようってやっていってる。
		僕が教会に入った時に役所なんかにすぐ顔が効く人がいて、その人が担ってたけど僕が入ってきて、彼が引退した。
		右も左もわからん時だったけど、それももう 30 年ぐらい経ってる。
	こころ塾の活動	懇話会の中で、地域の人を呼んでこころ塾っていうのを年に 3 回ぐらい開いてる。
		その場所ではカトリックの教えのお話をしたり、それ関連の講話をするために有名な神父にきてもらってこころの問題を地域の人、市民と話し合う。
		そういう場では、求められてるわけやから思いつき宗教色を出す。
	他宗教の教義に 関する学び	ほかの宗教との関わりの中で、懇話会の中で馴染みができる。
		教会に例えば神主さんとかにきてもらって、講話してもらってっていうのやってる。
		それで懇話会に参加してる僕だけじゃなくて、教会に普段来られてる人もそれ以外の宗教の考えや教えを聞けるようになったっていう良さもある。
		でもそれは、僕の力っていうわけじゃもちろんないけど、日頃の懇話会でのその方達の関わりがあったから成立した講話だったし、学びやった。
	づくりの重要性 日常の関係性	やっぱり緊急の場合はまた別やろうけど、見ず知らずの人をお願いとかってできないやん？
		だからこそ、日々の関係性が大事なんだって常々思うね。

宗教懇話会の課題	次世代の担い手の不足	僕もこういう歳になったし、懇話会自体も若返りをしないといけないと僕も思ってる。
		まあ別の話になるけど、これから僕も彼みたいに次の人に託そうかなって考えてるけど。
		っていうのも僕ももう長くなりすぎてるねんけど、跡がないんやね～、。
		2.3 人の人に声かけてみたんだけど、僕はよー行かんって辞めてしまった人がいるんで、僕が離れられなくなった。
	組織の若返りの推進	会長は変わらないんだけど、僕も副会長をずっとやってて、次会長がやめたら自分が会長にならずちゃいけないってなるともう年齢的に持たないよね今更。
		だから今期ぐらいでカトリックとしては役職をとりあえず別の新しい理事を入れて、ほんで副会長を降りてようとおもってる。
		新しい理事の後押しをしようかなって形でとりあえず組織内の変更をしだしてるとこやね。
地域住民との付き合い方	日常生活における信仰姿勢	僕がそういう風に言ってるってことは、こういう言い方はあれやけど下手なことではなくなる。
		そうやって僕は、あいつカトリックやのになって言われるわけにはいかないから自分自身で一つの設けをしてる。
		カトリックだけ酒も飲むし、みんなと普通の付き合いもするし堅いばかりじゃないっていう人間的なところも見て欲しい。
		それはもう自分の地域では、長年やってるからそのことはお互いに充分知ってる。
		それ以外ではカトリックだから云々っていう頼まれ方とか、相談っていうのはほとんどないね。
		地域には神社の氏子さんがいたり、共産党の人がいたりでもみんな友達だしその中で僕はカトリックの人ってだけ。
		仕事でも一緒に僕がカトリックだっていうのはみんな知ってる。
		仕事に対する影響はないけどそれも下手なことできないね。
		あいつ、って言われないようにするっていうのが一つと、まあ自分の姿勢の問題かな。
地域における共同性の捉え方	社会における共同性欠如への不安	僕が常々思ってるのは、今って共同性と個っていう対比がある。
		教会っていうのは、基本的に個じゃないくて共同性。
		でも世間でも言われてるように、最近は社会に共同性がなくなって個の集団になっていってる。
		個さえよかったら共同性は必要ないっていう社会ね。
		だからその中で、個々で生きてきて割とうまいこと行きかけてた。
		でもお互いに共同性がないもんだから、色んな弊害が出てきた。
		同じ家庭でも、共同性がなくなってきたから家庭でも色んな問題とか起きるようになる。
		今の社会は共同性がなくなってる、僕たちの価値観からすると一番やばいところにいると思う。
		みんな個が大事だから難しい問題。
		私だけを大事にして他のもんはいらんって、拒絶というか遠ざけるっていうのが同じ地域でも起こるんやからよろしくはないと思う。
		これはもう完全に個人としての活動だから共同体一個もない。
		一回個にならないと、共同性がわからないっていうところはあると思うけどね。
		今の社会はそれをやれる人がいっぱい出てきた。

		自分がやりたいことを自分の思うようにやりたいってなる人間なら誰しも。 そうすると人は個になるけどでも個だけでは、生きていけない。
		誰かと関わりを持たないと、人はひとりでは絶対に生きていけない。
共通のアイデンティティの必要性		うちの教会にこられたり、はたまた別のところに行ったり。
		別に教会である必要はなくて、同じ目的というか何か共通のアイデンティティを有するところに集まる。
		だから僕たちにとっては、その育む場所が教会であるってだけで 共同性を育む場所が必ずしも教会である必要性はないと僕は思う。
		人によってしたい事とか居心地の良さは違う。
		それを育む場には、アイデンティティというか共通の何か目的みたいなものがないと、 共同体にはなれない。
		寄せ集めでは一つにはなれないから宗教性っていうのはそういう面では強いっていう 見方もできるよね。
		そういう意味では、共同性を育むっていうのは容易なことではない。
限定的な共同性の危機		もう一個難しいのが何かしら同じアイデンティティの基に集まってそこで共同性を育 みますってところまでいっても、その共同性っていうのが助け合える共同性でないとそ こに集うひとたちはもっと上に行きたがる。
		そうすると自分たちの集いを保つために他を攻撃してしまうっていう構図ができあが ってしまう。
		大きな個っていうのかな？そこに集まってる人さえ良ければいいっていう風になっち やう。
		それではその人たちはいいかもしれないけど、周りに弊害が出てしまうしそれは健全と は言えない。
		だから共同性とか互助っていうのは単純なんだけど、実はすごく難しいことであると僕 は思うね。
家庭内における共同性の欠如		引きこもりの人とかね。まあでも彼らもご飯とかは食べさせて貰ってるわけやから一人 で生きてるわけじゃないんやけど。
		僕はそれは家庭やらなんやらで共同性を培われてないからだと思う。
		だから僕は変な話、祖父母と生活を共にすることはとてもメリットがあることだと思 う。
		何かしらの理由で親と共同性を培えなくても、まだ祖父母と培える可能性があるから ね。幼少期から
		その時はわからないかもしれないけど、大きくなったらすごくそれを実感すると思う。
外国人のため共同性の必要性		そういう中で地域がずっと個っていうことで固まりつつあったのに、最近は外から入っ てくるようになった。
		外国から出稼ぎに来るしとかいうことで、固まりつつあった個がざわついてきてる。
		その中で彼らはお互いはいわゆる個として入ってくるんだけど、その日本の個に怖さがあるの ね。
		だからどうしても共同性を持ったところに行きたくなる。
		そういう世の中になっちゃってるから逆に共同性に乾いてる人が多い。
		だからかえって共同性が浮き彫りになっていくんですよね。

	<p>教会がその共同性にとっても馴染んでるっていうのはあるかもしれない。</p> <p>だから信者じゃない、ベトナムの子達もくし他の人も来てるよ。</p> <p>共同性っていうのは、とてもいいものだと思う。</p>
外国人労働者から教会に対する求め	<p>教会員である場合は教会に来れてるから教会としては馴染める。</p> <p>うちはベトナムの子達しかいないんだけど、ベトナムは10分の1がカトリックなんやね。</p> <p>今は100何人毎週きててそんな中でもだいたい10%ぐらいはカトリックやね。</p> <p>だからベトナムから来た子たちは、教会に暇があったら来てくれるよね。</p> <p>その行為ってもちろんクリスチャンだからっていうのもあるかもしれないけど、共同性を求めてきてるっていうのも大きいんじゃないかなって思うね。</p> <p>現実的にそう思えるのは、ベトナムではカトリック信者ではない子らも毎週来てくれる。</p> <p>教会に入りたい云々じゃなくて、やっぱりそういう共同性の中に安らぎを求めてるんじゃないかなと思う。</p> <p>彼らもベトナムでは感じたことない、個という寂しさを感じてると思うね。</p>
日本語習得がしにくい環境	<p>日本語も一生懸命勉強するけど覚えられない。</p> <p>それは個の中やから、日本語で話す相手がいない。</p> <p>話す相手がいないから、同じ国から来た人たちと固まって母国語で話すから、日本語を覚えられない。</p>
日本語習得の機会を提 供する場	<p>最初に教会に信者ではないベトナムの子達がたくさん来た時に、まず彼ら彼女らに言われたのが日本語を勉強したいからそのためにきますって言って来だした。</p> <p>それで教会で、日本語の文化庁が出してる研修のわかりやすい日本語の会話集とかそういう用意したら是非欲しいってということで、全員に渡した。</p> <p>そして日曜日のミサが終わった後、残ってそこで日本語で話す練習をなさっていうことを今やってるね。</p>
ヨコのつながりの衰退	<p>日本の社会が今までみたいに、横のつながりがある社会だったらそこで馴染めると思う。</p> <p>どこに行っても個の所だから自分たちが馴染める居場所がないよね。</p>
教会での関わりを通しての 多様な価値観への 気づき	<p>個で安心する人も多かった社会だと思ってたんだけど最近是这样じゃないんだなって気づいた。</p> <p>そういう意味では教会は新しい組織というかタイムリーな組織かなあと思ってる。</p>

多様な価値観に対する 受容	教会での自分より若いひととか、外国の子との関りは面白い。あたりまえやけど、自分とは違う考え方をもってる。	
	そういうことを学べる機会ってあんまりないし、教会の中でももちろんだけど、教会外での懇話会とかボランティアでも、活かされてる。	
	色んな考えとか価値観のひとがいるんだってことを目の当たりにできる。	
	逆に外での活動から学ぶことも多くあるけどね。	
地域住民の肯定的な印象	よかったなと思うことは、これは信仰的なことになるんだけど、カトリックが認知されたってこと。	
	私の地域ではカトリックっていうのは、元来門を閉ざしてる雰囲気だと思われていた。	
	それがエキュニズムで、教会を開けて言われたんだけど、周囲の人にはなかなか伝わらない。	
	それを日頃の付き合いをすることによって、カトリックってまあそんながんじがらめのそういう組織じゃないんやなっていうことが認知されてきた。	
	あそこに行ったら洗礼を受けさせられるんじゃないとか前は思われていた。	
	でも結構ラフなんやなとか、人が居なくても教会の中に勝手に入ってもええらしいでーとかね。	
	お金を無心にくる人が来た時にはどうするかは決めてるけど、それも含めて近隣の人・地域の人と馴染みができてすごくよかったなって思う。	
障害者施設におけるボランティア活動	ボランティア活動	こひつじの苑にいったってボランティアとまでは行かへんかもしれん、けどお話し相手とかなんかもお手伝いとかをしてるかな。
		教会での関りは前からあったんだけど、施設にいくようになったんは最近かな。
	障害者施設での活動を通しての価値の変容	障害者の方が日々何を感じて、何を求めているのかっていうことはすごく勉強になる。
		キリスト教でよくいう人に仕えなさいっていうのも勉強できるし、僕個人としても、人として勉強になることが多い。
		最初のうちは綺麗に接しなければいけないって思ってた。
		でも今は喧嘩もするし、罵り合うこともあるんだけどそこまでいくことは悪いことではない。
		普通は腫れ物に触るじゃないけど、付き合い方もわからないし、相手が重度心身障害者だから彼らの心象を侵さないような方法で接する。
		それは大間違いで、それって同じ目線に立てないしそれは嫌だって施設の方達も言っておられた。
		自分たちに相手を合わせようとせずに、相手に合わせていけるようにしないとだめ。
		もちろんあるし僕は教会内の活動っていうのは、外に出ていくための活動だと思ってるんですよ。
教会が果たすべき社会的役割の模索	教会の中での役職っていうのは、教会をうまく取り繕っていくだけの活動ではないって僕はハナから思ってる。	
	他の人はわからないけど、教会内で培ったものを如何に外に持って行けるかって考えてる。	

		教会の共同性を地域社会でも会社でもそうやけど宗教色は出さず外で活かせないかと思ってる。
		まず教会のなかで練らないといけない。
		教会のなかで練れないと、教会としての役割を果たせていないし、外でもできない。
		教会の外で学んだりすることも多くある。
教会内における共同性の捉え方	育むことのできる教会 共同性という価値観を	数年前から地域ではすごい互助っていう言葉が行き交ってるよね？
		僕はこれは、教会で言うところの共同体とすごく近いものだなって感じてる。
		僕の場合で言うと、例えば困っている人の時には目となり耳となる。
		そうすることで、確かめたことはないけど相手は安心するだろうし、この人は私の話を聴いてくれる人だってなる。
		こういう悩みを抱えているんだとか、こういうことはしたらダメなんだっていう風な価値観とかを学べるよね。
		お互いになにかを得るしこれだけでは難しいかもしれないけど、それが続けば共同性を育める。
		それをするためには内で培って経験というか、共同性を体験しないと難しいよね。
		そこで初めて教会としての価値が出てくる。
		分かりやすいくと共同性はなかで育まれるけど、教会の外のために育まれるってこと。
		あと得たものでいうと、教会にはもちろん色んな人がいるから勉強になるというか、色んな人との付き合い方っていうのはとても学べる。
		その中で教会は逆に個はなくて共同性しかない。
	教会の特異性	僕は全員が全員教徒としてとても熱心であるとは思ってないよね。
		いつも個だから教会に来て共同性の体験をするたびにね、安心するっていう部分も大きいと思う。
		慈しみ献金っていってお金を集める時にすごく教会のなかでも意見が分かれてたことがあった。
共同性に関する議論 教会内における		やっぱり皆が言う事と一緒に、お金をせびりに来て無心にきいてるのが分かってるのになんで、与えないといけないのかっていう論議がいっぱいあった。
		共同性ってなにかっていうのをね話合えたからあの論議はよかった。
		んで結局はだまされようってなった。
		返ってこないだろうな一っと思いつながら、だまされようっていうことが僕たちの共同性だっていう結論になった。
		返しに来る人だっていて、どんなにその時は嬉しいとか。
		だからお金をあげるあげないっていうことじゃなくて、プールの範囲内であれば欲しいって言った人にはあげようって。
		やろうと思えば地域の役所に繋ぐとかできるけど、でもそれってだれでもやれることやからね。
		だから教会に行ったらお金もらえるねんって思うなら思わせよう。
		だってそれが欲しくて来て、自分の生活のぎりぎりのところになるんだから。

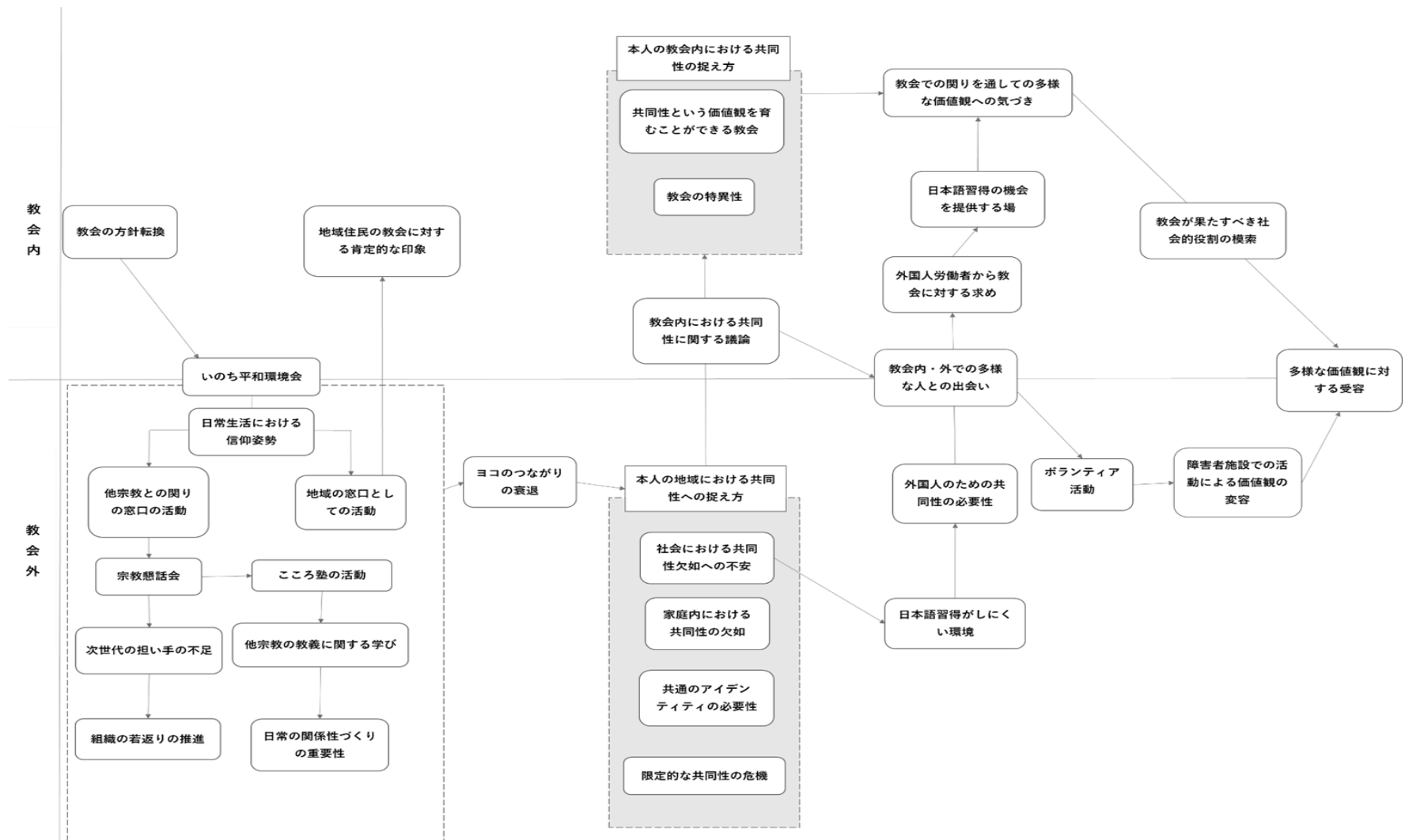


図9 C氏のこれまでの活動と価値観の変容（カテゴリー表に基づく関係図）

## ② Cさんのストーリーライン

インタビューを通して、【教会の方針の転換】を契機に、教会で【いのち平和環境会】が創設され、これまでは少なかった教会外での対外的な活動が増えてきたことが語られた。なかでも【地域の窓口としての活動】から、地域でこれまで互いに助け合ってきた関係が損なわれ、【ヨコのつながりの衰退】から、〔本人の地域における共同性への捉え方〕という固有の価値観を生み出していた。またその価値観から、【教会内における共同性に関する議論】を通して次は、〔本人の教会内における共同性の捉え方〕という価値観が表出しており、Cさんは地域と教会内とでそれぞれ固有の価値観を有していた。

さらに、〔本人の地域における共同性への捉えかた〕のなかでも【社会における共同性欠如への不安】が強まっており、地域が個で固まる状態だったことで、外国人労働者が【日本語習得がしにくい環境】であると考えていた。実際【いのち平和環境会】の活動で、日本語習得に悩む外国人をはじめとする、【教会内・外での多様な人との出会い】があり、地域で生活を営む外国人との関わりの中で、日本語を勉強するために教会に来たいという【外国人労働者から教会に対する求め】があり、外国人たちにとって教会が【日本語習得の機会を提供する場】として機能している。Cさんにとっては、多世代だけでなく異なる国籍の人びととの関わりの中にもなっており、【教会での関わりをからの多様な価値観への気づき】が生まれていた。加えて、教会外における【障害者施設での活動による価値観の変容】と【教会での関わりをからの多様な価値観への気づき】が【多様な価値観に対する受容】を生み出しており、教会内・外双方の活動に影響を与えていた。(図9)。

## ③ C氏における互助と助縁の位置づけ

C氏は、いのち平和環境会という教会外との対外的な活動を行う部会に属していた。その対外的な活動は大きく分け2つの窓口があった。なかでも【地域の窓口としての活動】では、地域の自治会や文化サークルへの場所の貸し出しの調整が主になされていたが、「今は司祭が常駐してないんで少なくなったけど、前常駐してる頃にしょっちゅうお金を無心にきてた」という語りからもわかるように、教会にお金を無心にくる生活困窮者への対応という活動もしていた。

そして生活困窮者にどのように対応するのかという【教会における共同性に関する議論】で示された、「共同性ってなにかっていうのをね話合えたからあの論議はよかった」や「返ってこないだろうなーって思いながら、だまされようっていうことが僕たちの共同性だったという結論になった」という語りがあった。

C氏のこれらの語りを、先行研究で示されている互助の枠組みから分析すると、教会外への互助として、恩田(2006)の互助の整理においては、教会外のひとに対する支援的行為として判断できる。

続いて、【日本語習得の機会を提供する場】での「最初に教会に信者ではないベトナムの子達がたくさん来た時に、まず彼ら彼女らに言われたのが日本語を勉強したいからそのためにきますって言って来だした」や「それで教会で、日本語の文化庁が出してる研修のわかりやすい日本語の会話集とかそういうの用意したら是非欲しいっていうことで、全員に渡し



た」という語りから、教会内での【日本語習得の機会を提供する場】は、キリスト教徒の外国人もいれば、そうでない者も多くおり、キリスト教徒限定の関係性でないため、広く一般市民への第三者に対する社会関係であると位置づけることができる。したがって、教会におけるこの取り組みは、恩田（2006）の互助の整理でみると支援的行為として判断することができ、教会という場を用いた助縁としての取り組みであるともいえる。

また、【多様な価値観に対する受容】での「教会での自分より若いひととか、外国の子との関りは面白い。あたりまえやけど、自分とは違う考え方をもってる」や「そういうことを学べる機会ってあんまりないし、教会の中でももちろんだけど、教会外での懇話会とかボランティアでも、活かされてる」という語りから、教会内における活動を通して慣行される互助が教会内だけに留まらず、教会外での活動に反映されているということが示された。

これらのことから、教会内での年齢や国籍を越えた多様なひととの関りは、相手がそれぞれどのような考え方や価値観を有しているのかといったことを知るきっかけになり、相手の価値観を受容することで多様なひととの関わり方や接し方の経験を蓄積していることが明らかになった。加えて、そのような経験が現在の自身の価値観や教会外への活動に影響を与えていたことから、教会内での活動はこれからの時代で必要になる、多様な人びととの関り方を経験できる特異性があることが示唆された。

### 3. 分析のまとめ

ここまで 3 名の分析結果について述べてきた。インタビュー調査での結果をまとめると以下の 3 点に整理することができる。

- ① 教会内における日本語の勉強会や子どもに対する教育活動において互助における支援的行為が存在していた。
- ② 教会活動を維持していくための関わりとして互助における互酬的行為が存在していた。
- ③ これらの教会内での互助に基づく活動を通して、3 名とも多様なひととの関わり方や接し方という経験を蓄積しており、その経験が教会外における助縁に基づく諸活動に影響を与えていた。

第 2 章にて、「教会内において慣行されている互助と教会外の第三者に対する互助行為には、助縁という関係性を促進する要因があると考えられる」ということを仮説としていたが、本調査を通して、以上の 3 点のことから仮説の一定の妥当性が検証できたと考えられる。

## 第4章 考察

本研究では、「地域共生社会」における自分でできることは自分で行う「自助」をベースに、地域住民同士が互いに支え合い、助け合う「互助」を活用し、自助・互助・共助・公助を組み合わせた、地域での支え合いを目指していくことが必要であり、その住民同士の支え合いに不可欠な「互助」による関係性に着目した。本章では、調査結果を基に、これからの地域において必要な地域資源における支え合い活動について考察する。

### 1. 地域社会における助縁の有効性

わが国の地域福祉において、「互助」という目に見えない概念の重要性は先行研究において指摘されていながらも、「互助」がどのように行われ、継続されているのかといった具体的なものは提示されてこなかった。そこで、「互助」の先行研究から「互助」とは、互酬的、再分配的、支援的機能をもつ行為と捉え、互助行為を通して成る関係性を血縁・地縁・助縁の3つの縁とし（第2章2節）、地縁が希薄化している現代社会においては、血縁や地縁に囚われない広く一般市民への第三者との関係性として助縁という関係が重要であることを提示した（第2章2節）。

以上のことを踏まえ、教会という場において展開される独自の活動に焦点を当て、教会における活動のなかに助縁を位置づけ、教会内での互助行為が、教会外での日々の生活や活動にどのような影響を及ぼしているのかを構造的に明らかにすることを目的としてインタビュー調査を行った。地域福祉における「互助」を考えるにあたり、教会での活動が1つの縮図として捉えることができ、教会内において行われている互助行為と教会外の第三者に対する互助行為には、助縁という関係性に影響を与えていると考えたからである。

調査の結果、教会活動においても高齢化の問題があり、活動の担い手が不足しているという現状のなかで担い手と受け手に分断するのではなく、全員で教会活動をおこなっていけるように互助の分類における双方向の互助である互酬的行為に基づいた関係性づくりがなされていた。また、教会内における子どもに対する教育活動では教会におけるイベントごとが何に基づいて行われているのかといったことや、教義に関することを子どもたちに教えるということを通して、互助の分類における一方向の互助である支援的行為に基づいた関りがなされていた。このように、地域社会をはじめとする地縁という社会関係の希薄化によって損なわれていた互助行為は、教会という助縁に基づく活動において培われていた。さらに教会で培われた互助は、教会外の助縁に基づいたボランティア活動や、仕事や地域活動などにも影響を与えていた。このことから、地域共生社会がいわれる現代における互助を考えるにあたり、助縁という属性を問わない人びととの関係性をつくることのできる機会を地域において設けることの有効性が見出された。助縁という関係性における互助には、同じ活動に参加しているひと同士の互酬的な側面もあれば、それ以外のひとに対する支援的な側面も有しているためである。

さらに、助縁という関係性を日常生活のなかで作ることによって、これまで関わる機会の

少なかったひとと関わるができるため、より広範囲なひととのつながりを生むことができる。加えてそのつながりを通してこれまで触れてこなかった価値観や考え方を学ぶなかで、地域の人びとの課題を解決しようとするための活動意欲や、つながりを持つことの充実感を得ることにつながっていくことが調査結果によって示された。

## 2. 教会という場において生み出される関係の特異性

前節では、教会という場において展開される独自の活動に焦点を当て、助縁という関係性がこれからの地域社会にとってどのように有効であるかについて調査結果を元に考察を行った。そのなかで、教会を助縁と位置づけ、互助行為が培われていたことを示した。

しかし、そもそも教会という場に集うひとはキリスト教を信仰しているという共通の目的を有している。そのため、信仰に基づき行われている教会内での活動は、教会員間の互酬性は高く結束しているものの教会員以外のひとにとっては閉鎖的になっている。

つまり、閉鎖的であるが教会員同士が結束しており互酬性が高いという関係性と、開放的であり教会外の第三者に対して支援的な活動をおこなう助縁という2つの関係性を有している教会は、地域社会においては特異な場であるといえる。これらの2つの関係性がどのようなプロセスをたどり生まれたのかということを図化したものが下の図10である。

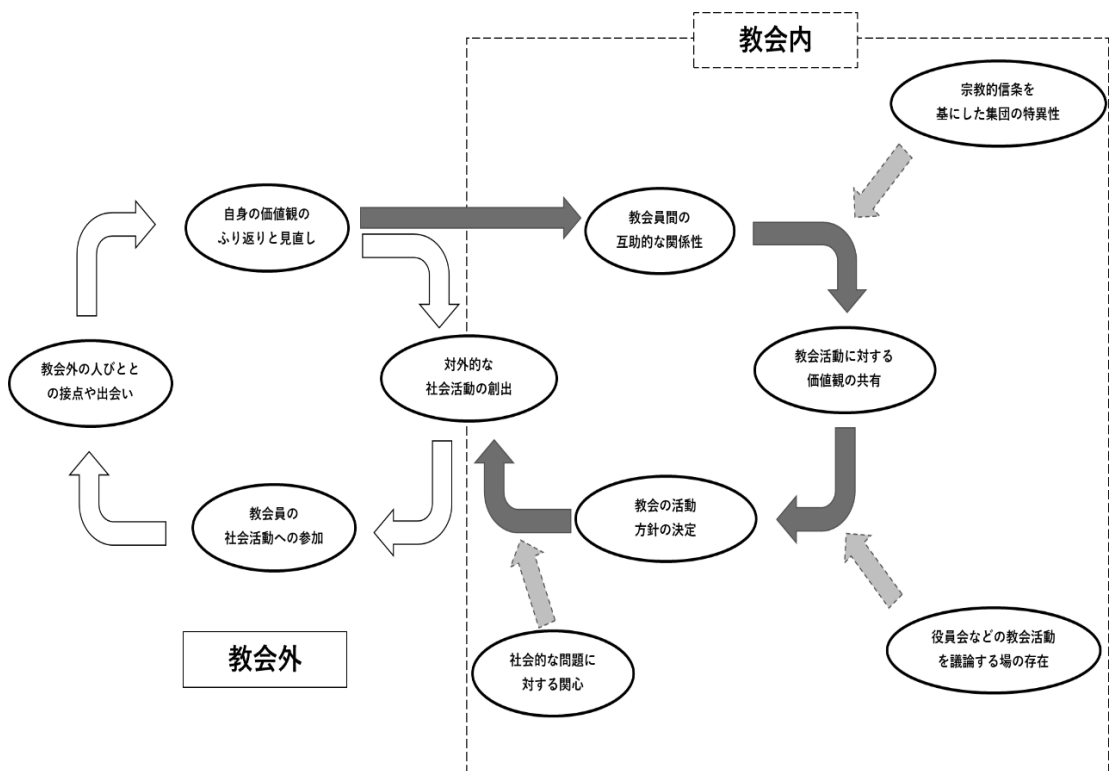


図10 教会内・外で生み出される関係性のプロセス

註：この図10における塗りつぶしの矢印は、教会内における互酬性を高めるプロセスを表しており、点線の矢印はそのプロセスの過程に影響を与えている要素を表している。そして枠のみの矢印は助縁に基づく関係性のプロセスを表している。

図 10 を見ても分かるように、教会内における教会員間の互酬的な関係性は、宗教的信条を基にしているため、限定的であり教会員以外のひとからすると、閉鎖的であるといえる。一方で、閉鎖的であるがため教会員同士は結束し、互いの価値観の共有を可能にしており、活動に関する議論の場を通して価値観に沿った活動方針が決まっていく。しかし、教会内だけの関係性だけに留まらず、教会活動のなかで社会的な問題に対する関心を持つことでいま地域社会になにが起こっており、教会外のひとからどのような要望があるのかといったことを加味したうえで、対外的な活動を生み出していく構造がある。そして、その対外的な活動を通して教会外の人びととの接点や出会いを契機に、自身たちの価値観の考え直しや、深化といった価値観の変容を生み出し、その変容は助縁に基づく関係性や教会内における閉鎖的な関係性の双方に影響を与えている。

教会という場においては、助縁に基づく開放的な関係性と閉鎖的な関係の 2 つを有しており、どちらか片方に偏るのではなく場面によって 2 つの関係性を使い分けていることから、教会内で培った経験や学びを教会外で実践し、教会外で学んだことを教会内で実践したりすることで、長い年月をかけ地域福祉の担い手としての経験値を蓄積しているのではないかと考える。

### 3. ソーシャル・キャピタルの苗床としてのキリスト教会

これまで述べてきたように教会には助縁という関係があり、その関係性における互助とは、血縁や地縁という限定された関係のなかだけで行われるものではなく、それらを包含し、さらにより広い一般社会における第三者との関係性のことである。地域社会が機能していくためには、その関係性を高めていくことが求められる。その一つ概念として、ソーシャル・キャピタルがある。パットナム (Putnam,R.D) によるとソーシャル・キャピタルとは、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」(稲葉 2007: ) とされ、わが国では主として「社会関係資本」として表現される。

ソーシャル・キャピタルでは、住民間の自発的な協調関係によってさまざまな問題が解決されることに力点が置かれ、付き合いや交流、信頼、社会参加などをその基本的な要素として捉えられるが、これは地域包括ケアシステムにおいても重視される視点である。山村は、地域福祉におけるソーシャル・キャピタルについて「人々やコミュニティに内在している信頼や絆、コミュニケーションなどを高める資源であり、それが機能することにより地域福祉の向上に寄与する」(山村 2013: 29) と定義しており、地域社会が福祉問題の解決の場として機能していくためにはソーシャル・キャピタルの蓄積が重要であるとしている(図 11)。

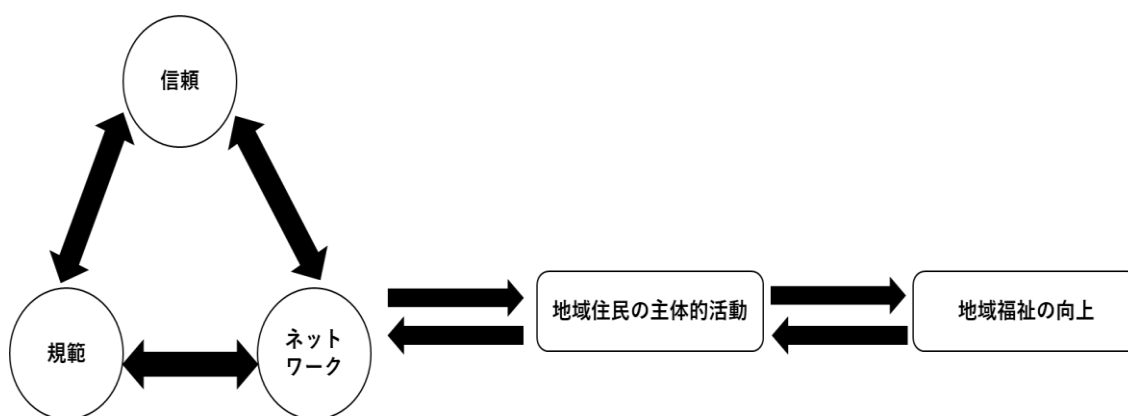


図 11 地域福祉とソーシャル・キャピタルの関係

出典：山村（2013）「ソーシャル・キャピタルのイメージ」「地域福祉とソーシャル・キャピタルの関係」をもとに作成,地域福祉論,p.168-169

このように、地域の希薄化によって地域福祉活動の在り方が大きな課題となっている今日では、住民の主体的な活動を促進し、ソーシャル・キャピタルを高めていかなければならない。さらに、ソーシャル・キャピタルとは個人と個人、個人と集団、個人と社会によって構築される関係性に着目する概念であるため、ソーシャル・キャピタルが培われる関係性は、限定されたものだけでなく、より広い一般社会における関係性のことであるともいえ、その関係性は助縁に近いものであるといえる。

わが国における福祉サービスは高齢者、障害者などの分野別に分かれており、地域共生社会が目指されているながらも、フォーマルサービスは縦割りのシステムとなっていることが課題としてあげられる。したがって、同じ地域で生活しているにもかかわらず、住民たちの関係や支え合いを遠ざけてしまうという構造になっている。こうした固定化された枠組みでは、限定された人との関わりだけとなり、それ以外のひとに対して排他的になってしまう可能性がある。

本研究では、助縁に基づく互助の必要性を述べてきたが、これまでの分野にとらわれないつながりをもてる場の提供や活動の機会が広がることで、より広範囲な地域住民同士の交流や付き合いが生まれるということを提起したい。より広い交流が生まれることによって、これまで住民が主体となり行ってきた活動も幅が広がるため、住民間の自発的な協働関係も促進されるのではないかと考えるからである。

教会にはこれまで長い時間をかけ教会内・外で培ってきたさまざまなひととの関わり方や接し方という経験値と、関わりから学んだ多様な価値観が蓄積されている。この経験値は、今後日常における困難を抱えたひとに出会ったときの関わり方の基盤ともなりうる。またこれから地域共生社会が目指されるなかで、多様なひとと関わりを持たなければならない社会が訪れるなかで、教会が現在おこなっている地域社会との関わり方は先駆的であるといえる。それだけでなく、教会のなかで蓄積されている経験値や地域社会における課題を主体的に解決するために必要なソーシャル・キャピタルの要素を活用しないままでは、地域社

会全体の経験値の蓄積も進展しないため、教会にとっても地域社会にとってもプラスの効果をもたらさないのではないだろうか。そうならないように、教会だけでなく宗教施設が蓄積しているソーシャル・キャピタルを活用することも、今後検討する必要があるのではないだろうか。

## おわりに

本研究では、地域共生社会が目指される近年において課題とされている地域の希薄化を解決するための手がかりとして、これからの地域において必要な地域資源における支え合い活動を考察することを目的とし、教会における活動に着目してきた。本稿では、これからの社会では年齢や性別をはじめとする個人が有している属性をこえた助縁という関係性における互助が重要であることを述べるなかで、個人の属性をこえた関りを有している教会に着目し、調査によりさまざまなひとと出会うことができる教会内では、行われている互酬的行為や支援的行為といった互助行為が培われていることが明らかとなった。さらに、さまざまなひととの関わりを通して蓄積されたひととの関わり方や接し方といった経験値が教会外での助縁に基づく活動に影響を与えていることが示された。調査を通して、普段教会員が何気なくおこない経験してきたものを調査対象の教会員と意味づけしていくなかで、日頃から意識していない互助という行為を焦点化できたことはとても意味のあることであったと考える。

しかし、本研究における調査は1つの教会の3名の教会員という限定的な調査しか実施していないため、明らかになった調査結果が全国の教会でも同じようなことがいえるわけでないことが本研究の限界として挙げられる。加えて、教会員を対象にインタビュー調査をおこなったため、教会員以外の地域住民が教会をどのように認識しているのかといったことを明らかにすることができなかった。また、宗教離れというように現代の日本人は宗教というものを忌避する傾向があり、宗教と繋がっている施設に対して抵抗感もっている場合もあるため宗教が日常生活において馴染んでいないことが、宗教者が地域活動を表立っておこなえない阻害要因になっていることが考えられる。

以上、本研究においては、多数の課題と限界が存在しているが、今後それらを1つずつ克服していくなかで研究を進めていかなければならない。今後の研究の基盤として、本研究から地域福祉の課題解決を考えるにあたり、地域社会に存在する教会をはじめとする宗教施設を活用することの可能性について明らかにしていきたいと考えている。

その上で、本研究でも用いた助縁という関係性や地域福祉においてもたびたびいわれる互助という概念は目に見えないものであるがために、つながりやお互い様の関係というような曖昧なまま用いられ研究されていることが多い。しかし、この概念はもともと社会学領域から見出された概念であるため、今後もこの概念を用いて研究を行うさいには、互助というものはどういうものであるのかを注意して扱う必要があることを喚起しておきたい。しかし、この助縁という関係性における互助行為はこれからの地域共生社会において必ず有用である概念であるため、今後の研究において、より具体的に明らかにしていきたいと考える。

## 註

- 1) 公立みつぎ総合病院の院長を務めた。
- 2) 「地域ケア」の展開の背景として、高齢者人口が増大したことによる医療費の問題といった財政上の問題があった。また、医療技術が向上したことで人口は長寿化し治療だけでなく、治療後のフォローアップが必要とされてきた。高齢者やなんらかの障害を抱えた高齢者が、医療と併せて生活を営んでいくための支援は、本来福祉サービスで賄われるはずのもののだが、当時の老人福祉は低所得者向けの選別的なサービスであった。そのため、入院治療が必要なくなった後も、地域で受け入れ態勢が整っておらず生活を営めないために、社会的入院をする高齢者が増大したことにより、保健医療福祉の協働が必要であるとされ、「地域包括ケアシステム」という概念が創唱され、各地で公立みつぎ病院がおこなった取り組みがおこなわれるようになった。
- 3) 2003（平成 15）年に厚生労働省老健局に設置された「高齢者介護研究会」がまとめた報告書「2015 年の高齢者介護—高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて」



## 引用・参考文献

- ・稲葉陽二（2007）『ソーシャル・キャピタルー「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題ー』 生産性出版
- ・稲葉陽二（2008）『ソーシャル・キャピタルの潜在力』 日本評論社
- ・井上 信宏（2016）『高齢期の生活保障と地域包括ケアー<特集>社会保障改革と地方自治体：2015 年問題の現状ー』 社会政策 7(3), 27-40,
- ・ウヴェ・フェリック著小田博志監修（2011）『質的研究入門ー〈人間の科学〉のための方法論』 春秋社
- ・恩田守雄（2006）『互助社会論』 世界思想社
- ・恩田守雄（2008）『共助の地域づくり「公共社会学」の視点』 学分社
- ・恩田守雄（2019）『支え合いの社会システムー東アジアの互助慣行から考えるー』 ミネルヴァ書房
- ・神波幸子・春見静子・伊藤春樹・谷口純世（2008）『カトリック社会福祉施設・機関の使命・役割について』 医療福祉研究 第4号
- ・川口一美（2018）『住民の弱い紐帯を生かした地域づくりー地域の社会資源を活用する方法をめぐるー』 聖徳大学生涯学習研究所紀要
- ・川添航・平澤賢剛・Zou Siqi（2019）『伊那市における宗教施設の維持と活動の変容：寺院・神社・教会の活動を通して』 地域研究年報
- ・関西学院大学神学部（2019）『高齢社会と教会』 キリスト新聞
- ・倉沢進・秋元律郎（1990）『町内会と地域集団』 ミネルヴァ書房
- ・厚生労働省（2016）『厚生労働白書（平成 28 年度）』
- ・サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（2019）『質的研究法マッピングー特徴をつかみ、活用するためにー』 信曜社
- ・澤田道夫（2017）『地縁組織の活動の歴史的背景とその現代的意義ー町内会・自治制度をめぐる基礎理論的研究（1）ー』 アドミニストレーション第 24 巻第 1 号
- ・柴田謙治（2010）『キリスト教系高齢者福祉施設における文化活動と「つながり」の生成ー旭ヶ丘の家（函館市・カトリック）の実践から学ぶー』 金城学院大学キリスト教文化研究所紀要
- ・白澤政和（2014）『地域のネットワークづくりの方法ー地域包括ケアの具体的な展開ー』 中央法規
- ・鈴木淳子（2005）『調査的面接の技法』 ナカニシヤ出版
- ・高橋典史・白波瀬達也・星野壮（2018）『現代日本の宗教と多文化共生ー移民と地域社会の関係性を探るー』 明石書店
- ・田中滋（2014）『地域包括ケアアクセスガイドー地域力を高めて高齢者の在宅生活を支える』 メディカ出版
- ・田中博晃（2010）『KJ 法入門：質的データ分析として KJ 法を行う前に』 外国語教育メデ

- ィア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会 2010 年度報告論集
- ・ 田所聖志 (2018)『地域包括ケアにおける「互助」概念と贈与のパラドックス  
ー互酬性をてがかりにー』 日本健康学会誌
  - ・ 地域包括ケア研究会報告書 (2016)『菱 UFJ リサーチ&コンサルティング (平成 28 年度)』
  - ・ 内閣府 (2012)『高齢社会白書平成 24 年度』
  - ・ 内閣府 (2016)『高齢社会白書平成 28 年度』
  - ・ 中嶋洋 (2015)『初学者のための質的研究 26 の教え』 医学書院
  - ・ 永田祐 (2013)『住民と創る地域包括ケアシステム』 ミネルヴァ書房
  - ・ 永井恵一・十代田朗・津々見崇 (2004)『東京 23 区におけるキリストと今日も立地と地域活動に関する研究』 日本都市計画学会 都市計画論文集
  - ・ 西村麻希・長野恵子 (2012)『現代青年の友人関係のあり方に関する質的研究ーKJ 法による自由記述の分析を通してー』
  - ・ 沼尾波子 (2016)『社会保障制度改革と自治体行財政の課題ー<特集>社会保障改革と地方自治体 : 2015 年問題の現状ー』 社会政策 7(3), 12-26,
  - ・ 文化庁 (2016)『平成 28 年度宗教年鑑』
  - ・ 藤原史博・勝原裕美子 (2010)『患者に対する看護師の誠意の構造ーインタビューの結果からー』 日看護会誌 vol.14,2
  - ・ 牧田満知子・立花直樹 (2017)『ソーシャル・キャピタルを活かした社会的孤立への支援ーソーシャルワーク実践を通してー』 ミネルヴァ書房
  - ・ 松繁卓哉 (2012)『地域包括ケアシステムにおける自助・互助の課題』 保健医療科学
  - ・ 向谷地生良 (2015)『精神障害と教会ー教会が教会であるためにー』 いのちのことば社
  - ・ 三橋俊雄・詫磨紀子 (2009)『京都市左京区下鴨の協会を拠点とした地域コミュニティ』日本デザイン学会研究発表大会概要集
  - ・ 山村靖彦 (2013)『高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の支援の指標に関する研究 : ソーシャル・キャピタルに着目した地区の類型化から』 別府大学短期大学部紀要 (32), 27-41, 2013-02

## 謝辞

本研究にご理解をいただき、ご多忙にもかかわらずインタビュー調査の協力と貴重なご意見をしめしてくださった、Z教会の教会員に方々に心から感謝申し上げます。

本研究をととても温かく指導してくださったのは、指導教授である関西福祉科学大学大学院教授の斉藤千鶴先生でした。研究が思ったように進まず行き詰っていたなかでも、忙しいお仕事の間を割いてくださり、研究室にてご指導を賜りました。論文の書き方をはじめ、先行研究の調べかたなど、斉藤先生にご教授していただいたことは尽きません。私の考えを決して否定せず、いつも肯定的な言葉をかけてくださり、心が折れそうな際も斉藤先生の指導にはいつも救われていました。心から感謝申し上げます。

また、斉藤先生のもとで共に学び、議論をし、励まし合った同期の上山さんにも感謝申し上げます。大学院に進学が決まった際、ひとりしかいないのではないかと、怯えていた私にとって、上山さんの存在はとても大きいものでした。ネガティブな私にとって、ポジティブで眩しくいつも前向きな上山さんと同期であったことは、とても良い意味で刺激的でした。良き相談相手として、議論のできる友人として、上山さんの存在は本研究に対しても多大な影響を与えてくれました。

そして、本研究のテーマでもある宗教と地域福祉という研究をおこなうにあたり、関西福祉科学大学の講師である種村理太郎先生には大変お世話になりました。研究分野が同じということもあり研究分野の唯一の理解者であった種村先生は、ときに温かく、ときにととても厳しくご指導してくださいました。種村先生の福祉に対する探求心、知識量、学ぶことへの姿勢には、常に驚かされてばかりでした。それだけでなく、本研究における調査・分析・考察に関するご指導をはじめ、研究者としての姿勢を行動で示し、ご教授してくださいました。種村先生からのプレッシャーは私にとっては脅威ではありましたが、そのプレッシャーの根底には愛を感じられることばかりでした。本研究に必死に取り組むことができたのも種村先生のおかげであります。とても感謝しております。ありがとうございました。

さらに、関西福祉科学大学准教授である小口将典先生には多くのことを学ばせていただきました。大学院に進学するか迷っていたとき、父から言われた「信用できる仲間、尊敬できる師匠に出会いなさい」という言葉を思い出し、先生の顔を思い浮かべながら進学を決めました。私にとって小口先生は尊敬できる師匠であると確信しております。また、先生に出会った頃は、素行もあまりよろしくなく、福祉への関心も薄れており、中途半端で自堕落な生活を送っていました。しかし、大学3年生の研究演習で先生のゼミに入れていただいたから、私の人生は大きく変わりました。先生の講演や講義や指導での話し方は、いつも心に直接訴えてくるようで、こんなにも心を震わせる話し方をする人がいるということに、感動した当時を今でも覚えています。また、先生が博士論文執筆中に時折見せていた、孤独や不安と向き合いながらも研究と向き合う姿勢にととても憧れていました。小口先生にとって良い弟子であったかは定かではないですが、私にとって小口先生は両親以外ではじめて信用でき尊敬できる大人であり、とてもいい師匠でした。

加えて、本研究を進めるにあたり、学部時代に抱いていた問題意識や研究への思いを失い、研究と向き合えていなかった私に対し、厳しく突き放しながらも、とても温かく見守り、苦しんでいるときには優しく手を差し伸べてくださいました。今の私があるのは、先生のご存在やご指導があったからです。深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして、大学院の後輩たちの存在はとても大きいものでした。夜遅くまで院生室のパソコンに向かい研究を進め、互いに励まし合い高め合ってきました。その一つひとつが研究を支え、修士論文を書き上げることができました。大学院の後輩たちに感謝しています。

最後にはなりましたが、大学院への進学を理解し支え続けてくれた、両親をはじめ、進学を喜び応援してくれた祖父と祖母に深く感謝申し上げます。本当にありがとう。

謝意は尽きませんが、これまで研究を支えてくださった方たちに、感謝の意を捧げたいと思います。